

チャールズ・ハーツホーンの生涯と思想（Ⅰ）

大 塚 稔

Charles Hartshorne's Life and Works（Ⅰ）

Minoru OTSUKA

チャールズ・ハーツホーン（Charles Hartshorne）は、今年、百歳の誕生日を迎えた。彼はプロセス神学者としてつとに有名だが、その関心は単に神学の領域にとどまらず、哲学全般に及んでいる。ホワイトヘッドやパースに影響を受け、独自の有神論哲学を構築した。その思想は高く評価され、現存の思想家双書 **The Library of Philosophers** の一冊に、*The Philosophy of Charles Hartshorne* として付け加えられた。この双書には、これまで第1巻のデューイをはじめ、サンタヤナ、ホワイトヘッド、ラッセル、アインシュタイン、ポパー、クワイン、サルトルたちが収められた。いずれも一時代を画した思想家たちばかりである。現存している間に当の思想家に反論の余地を与え、可能な限りその思想を公平に捉えようという姿勢に貫かれた双書である。ハーツホーンもようやく1991年、94歳にして、この双書に収められた。

しかしこれまでの思想家たちに比べ、ハーツホーンの思想は、世間的にも、専門の哲学者たちの間でも、それほど正当に評価されているとは言えない。アインシュタインやラッセルの名は知っていても、ハーツホーンの名を知る者は少ない。彼は、神学史上に革新的な旋風を巻き込んだが、その意味もほとんど知られることがない。百歳の誕生日を前に彼の生涯と思想を簡略に記す所以である。哲学者ラッセルも長命であったが、98歳でその生涯を終えた。百歳の現役哲学者というのはきわめて異例である。

ハーツホーンは自叙伝を三種類ほど書いている。一つは数頁ほどのもので、*Existence and Actuality* 所収の 'How I Got That Way' <HI>、もう一つは *The Philosophy of Charles Hartshorne* 所収の 'Intellectual Autobiography of Charles Hartshorne' <IAH>、最後の一つは、*The Darkness And Light* <DL> である。これは、4百頁余りの大部の書物で、随所に写真が挿入された珍しい自伝である。

Ⅰ 祖父母と両親

チャールズ・ハーツホーンという名前は、祖父に由来する。祖父チャールズ・ハーツホーンは、大陸横断鉄道の一部を担う企画を立案し、その社長や副社長を歴任した経歴の持ち主であった。オクラホマに現在もハーツホーンという地名が残っているが、これはその時の祖父の功績が讃えられ

てのものである。祖父チャールズ・ハーツホーンはクエイカー教徒であったが、祖母は監督教会に改宗してしまった。ハーツホーンの父親になるフランシス・コウプ・ハーツホーンはクエイカー教徒の父と監督教会の母とに育てられた。フランシスは、父の意志を汲んでハーヴァード大学で法学士の称号などを取っているが、神学に興味があったため、また自分の気に入った娘が監督教会派に所属していたこともあって、監督教会派の牧師になっている。フランシスが気に入った娘が後にチャールズ・ハーツホーンの母になるマーゴリット・ホートン・ハーツホーンであった。彼女は、*The Holy Sprite* の著者として知られる学者気質の監督教会派の敬虔な牧師レヴ・ジェイムズ・ホートンの娘である。チャールズ・ハーツホーンは、この二人の敬虔な監督教会派の両親の長男として誕生した（他に、姉が一人、双子の弟を含め兄弟が4人、料理人1人、母のお手伝い1人、両親を合わせれば都合10人の同居生活であった）。

父フランシスは、単に敬虔な牧師というだけではなく、その信条に即して生き通した人物であった<'How I Got That Way', p.ix>。キリスト教は愛の宗教であって、神が愛であること、神への愛、同胞である被造物たちへの愛こそがキリスト教の根本であるという信念を持っていた。愛情深く、優しく、人を公平に扱える人物、自らは裕福な家庭に育ちながら、弱者に対する共感も持った人物であったと言う。彼はまた、古典音楽やテニス、マシュー・アーノルドなどに興味を持つ一方で、自然科学にも造詣が深く、既に進化論を受け入れる度量すら持った牧師であった。人間の自由を信じ、世界の出来事が神によって完全に決定されるものとは信じていなかった。聖書を絶対視する聖書至上主義者は滑稽であること、また中世のスコラ神学は、諸公理から不合理な結論を導く演繹体系であって、この不合理な結論を避けるためには公理の一部を捨て去る必要があるとも考えていた。説教は、まるで弁護士が訴訟事件の摘要書を読むような論理性の強いものであった<DL. p.47>。ハーツホーンは、この父にいくらかオイディプス・コンプレックスを抱いており、父の母に対する態度にいらだちを感じることもあったようだ。論議が政治問題に及ぶと、トルストイ的平和主義にかぶれていたハーツホーンとは激しいやり取りが起こったこともある。この父は健康に恵まれていたが、晩年あやまって電線の一部に触れ、それがもとで死亡している。このような事故がなければおそらくハーツホーン同様、百歳までは生きられたかもしれない。

母マーゴリットは、十九世紀末に流行したギルバートとサリヴァン共作の喜歌劇を好む陽気な人物であったが、一方では古風で頑固なところもあった。末っ子のアルフレッドが気に入った貧相なプロレタリア階級の彼女を家に連れてきた際には、「アルフレッド、結婚はもっと真面目なものだよ。愛するだけでは駄目なの。ずっと愛し続けなければならないの。でなければその人に失礼です」<DL. p.39>と言ったりしている。これでこの結婚は破談になった。またハーツホーンが、好きでもなければ結婚も考えてはいないのに、何かしら引かれる彼女のことを愚痴っていたとき、「チャールズ、人生は雄大だよ」<DL. p.39>と論じた。些細なことを余り重大に考えてはならないというのである。自分では料理を作らず、家事は手伝い人の黒人に任せていたが、黒人に対しては礼を尽くして接していた。マーゴリットが黒人を教区民として推薦した際、黒人の姓に敬称 <Mrs.> を付けて紹介したらしい。黒人に敬称を付すことは当時としては異例のことであったが、それが私の習慣だと言い張った。この母の一生でほぼ全てが決められていたようだ。その彼女の口癖は、「変わらないものはない」であった。

なお蛇足ながら、次男のリチャード・ハーツホーンは、後に世界的に有名な地理学者になったし、

遠い親戚筋の叔母にあたるアンナ・C・ハーツホーンは、二巻本の大著『日本と日本人』（1902年刊）の著者として知られている。彼女は、津田塾大学の創設時に、津田梅子に資金提供し、創設者の一人になっているだけでなく、実際に十数年間、津田塾大学で英語を教えた経歴もある。

Ⅱ 幼年・少年時代からイーツ高校

ハーツホーンは、1897年6月5日、ペンシルヴァニア州のクタニングに生まれた。ペンシルヴァニア州は、もともとクエイカー教徒の13の移民地の一つであったが、クエイカー教徒のいなかった町が二つあり、その一つがクタニングである。クタニングは、ペンシルヴァニア西部の人口4,000人ほどの小さな町である。ピッツバーグからは北に約45マイル離れており、アレジェニー川東岸に広がっている。「道は田舎道で、車もほとんど通らず、交通事故には無縁な町であった。好きなときに気兼ねすることなく自転車に乗れた」と回想している＜DL. p.9＞。クタニングは産業都市ではなく、周辺には目立って裕福な家庭はほとんどなかった。電気や電話は通っていたし、車も走ってはいたが、まだラジオやテレビはなかった。ハーツホーン家の地下室には電気があったらしいが、おおむねガスと石炭の生活であった。自分の土地で育てた野菜を売りに歩いたこともあったという＜DL. p.10＞。もっとも父親は、比較的早くから自動車を所有していたが、町には二台しかなかった貴重品であった。手伝いもコックもいたりしたと言うから、それほど貧窮していたわけではない。バターを食べ過ぎて叱られた程度である。ハーツホーンはこの町で11歳（1907年）まで過した。

その後、父親の退職を機に、ペンシルヴァニア東部のスキュニクル川沿いの町フェニックスヴィルに移り住み、そこでパブリックスクール最後の二年間を過ごしている。このパブリックスクール時代の授業態度の一端を示す面白い記述が自伝 *The Darkness and The Light* の一節に語られている。「文字がいつ読めるようになったのか記憶にない。授業に退屈した覚えはないのだが、定規に紙ボールを乗せて飛ばしていた記憶はある。これは勉強に集中力がなかったことの表れだ」＜DL. p.65＞と。この頃、彼を含む兄弟は全て、父が1909年頃に創設したボーイスカウト・トゥループ（全米ではじめて、あるいは2つ目という組織）に入団し、キャンプの楽しみを覚えた。ホレス・ケファートの『キャンプと森林生活の知恵』を読んだのもその頃であろう。この少年時代には、自分が中心になって野球チームを作ったり、川で楽しく泳いだりと、極めて天真爛漫な生活を送った。もっとも一人でいることも好んだようで、単身で自転車旅行などにも行っている。将来は、森林警備隊にでもなろうと考えていたらしい。

比較的優秀であったハーツホーン（すぐ下の弟リチャードは翌年）は、父親の決定に従ってペンシルヴァニアにある監督教会派の四年制の私立高校イーツに進学する（この高校は経済的な理由もあってかなり昔に廃校になっている）。この4年間（1911-1915）の寄宿舎での生活が、親元を離れた初めての経験であった。校長であり、創設者でもあるフレデリック・ガードナー博士は、物理や生物を担当し、進化論についても触れたようだが、神学と進化論とが矛盾するという主張は一度も聴かなかったと言う。彼から科学に対する一般的な関心を引き起こされた＜DL. p.67＞。

一人でいることを好んだハーツホーンは、インディアンとの闘いなどで名を馳せた開拓時代の英雄キット・カーソン＜Kit Carson＞やダニエル・ブーン＜Daniel Boone＞の書物を携えて、原野の孤独を享受していた。一人でいることを寂しいとは思わなかった。自然に恵まれた環境は自ず

とワーズワースの詩に親しませた。そうして自然をワーズワース的な感覚で捉えることに満足した。しかし単に自然に親しんでいたわけではない。ハーツホーンは、この高校時代に思想的に大きな転換期を向かえる。一つは、経験的科学家としての一面を育むことになった鳥類学への目覚め、もう一つは、哲学への覚醒をもたらしたエマーソン『随筆集』との出会い、最後は、伝統的キリスト教に対する見方を根本的に変えさせたマシュー・アーノルドの『文学とドグマ』との遭遇、である。

鳥類学への目覚めについては、育った環境や当時通っていた高校周辺の自然環境も大きな影響を与えているが、直接の動機は、高校1年の最初のクリスマスに家族への手土産にと買って帰った Reed の *Song And Insectivorous Birds East Of The Rockies* から受けている。このポケットサイズの鳥観察ガイドブックによって、彼の経験的科学家としての人生が始まった。1912年のことである。以降、彼はペンシルヴァニア東部で鳥を観察し続け、処女論文を発表した。これは、自然観察の優れた論文として高校から賞を受けている。意気盛んなハーツホーンが「決してこの好奇心は捨てません」と向こう見ずに言った言葉に、ガードナー博士は、「ちょっとした成果にうぬぼれてはいけない。そんな興味はたやすく失われてしまう」とたしなめた <DL. p.69>。この言葉通り、その後の十数年間はほとんどバードウォッチングに興味を持たなくなった際に、博士の真意が理解できたという。その後、招聘教授や講演旅行に行った国々で鳥を観察し、大学にも通い直して鳥類の研究を仕上げたのは、58歳の時である。これが *Born to Sing* という著作である。

ハーツホーンがエマーソンの論文と出会ったのも、その年のクリスマスの帰省時である。何気なく父の書棚から手に取った書物が、エマーソンの随筆集であった。この著作はすべて読破している。これによって彼の人生観は決定的に変えられた。この読書がいかに関心や感性に影響を与えたかについて、ハーツホーン自身はこのように語っている。「これまで多くの師に出会ってきたが、このエマーソンほど私の現在の思想に影響を与えた哲学者はない。私はエマーソン主義者ではないが、エマーソンがいなければ現在の私は存在しなかったであろう」 <IAH. p.13> と。もっともこれは、ある一つの原因が必要条件 <sine qua non> であることを示しているだけで、これによって彼の全てが決定されたという意味ではない。とは言え、その影響は大きかった。放置していた盲腸の悪化による手術で闘病生活を強いられた際、ハーツホーンは作詩に熱中する。そして一流の詩人になることを夢見たりするが、後にその頃に作詩した詩が、実はエマーソンの焼き直しでしかないことに気づいて、余りの影響の強さに愕然としたと言う。エマーソンは、ハーツホーンが生まれてはじめて接した思想上の偉人であった。プラトン主義的な理性優位の基本姿勢は、このとき以来のものである。

最後の書物は、マシュー・アーノルドの *Literature And Dogma* との出会いであった。これをどのようにして手に入れたのかは記憶にないらしいが、この書物によって、ハーツホーンは独断のまどろみから目覚めさせられた。これはカントとヒュームの関係に比肩されるほどのものであった。このアーノルドの伝統的なキリスト教批判に、ハーツホーンは大きな衝撃を受けた。エマーソンの随筆集が間接的な批判だったとすれば、アーノルドの書物は、私の精神に革命をもたらす起爆剤になったと言う <Existence and Actuality, 'How I Got Way'. p.xiii>。抑え難い衝撃の余り、両親にそれを話すと、母は失望し、もはや宗教の話題については取り上げなくなった。父とは数年間の文書でのやり取りを経て、結局、自分たちの信念についてはこれ以上論議をしないでおこうという形で落着。「お前を型にはめてきたつもりはない」というのが父親の結論であった <DL. p.51>。

これ以後、ハーツホーンは神学上の不合理な信念を払拭することに関心を集中することになる。

Ⅲ ハーヴァーフォードカレッジ

1915年から17年まで、ハーツホーンはハーヴァーフォードカレッジに通った。父も祖父もこのカレッジの卒業生であったこともあり、父の勧めに従ってハーツホーンはこのカレッジを選択した。選択にあたって特に父の意に背こうとは思わなかった。このカレッジの在校生は250名。比較的裕福な学生が多い割には、特に秀でた学生は少なかったらしい。しかし教師には素晴らしい人物がいた。英文学の素養の大半は彼に負っているとまで絶賛されている F.B. ガマー <Gummere> 教授である。彼は、ハーヴァード大学の椅子を蹴っているが、その理由がまた洒脱でおもしろい。曰く、「好きな釣りができなくなるからだ」と <DL. p.117>。また有名なアンソロジーの編者として知られていたシドニーから英作文の指導を受け、「物事を安易に信じてよいか」というレポートを書いている。これは、デカルトを知る以前に、懐疑の意味を考えたもので、セクストス・エンペイリコスの立場に近いものだったと述べている <IAH. p.15>。

この時代にもっとも大きな影響を与えた教師は、アメリカを代表するフレンド派（クエイカー教徒）の牧師、ラファス・ジョーンズである。彼はまたハーツホーンが最初に出会った哲学の教師でもあった。ジョーンズは、いわく言い難い神秘主義の研究者として通っていたが、また同時に極めて個性の強い人物で、同時に健全な常識とユーモアとを合わせ持っていた。ハーツホーンは心に残った彼の言葉として次の二つことを伝えている <DL. p.120>。一つは、卒業を控えたハーツホーンに、「クレイトンの著作を読め」という助言を与えたこと。クレイトンは、アメリカ流の観念主義の創始者で、*Philosophical Journal* の編集長でもあったが、ハーツホーンは彼の過程<プロセス>を根本に据えた思想と価値を思考の原理として、全ての思考と経験とが価値的であるとした考え方に大きな影響を受けた。この時の読書が後に、ヘーゲル、フィヒテ、シェリングらのドイツ観念論者の諸著作に触れる機会を生みだした。そしてこれが、後年チャールズ・モリスが、「君は現存する偉大な観念論哲学者だ」と言わしめることにもなる。もう一つは、「全ての哲学体系にはどこかに袋小路がある」というラファスの言葉である。

ラファスはキリスト教史の授業で、自分の師であるロイスの『キリスト教の問題』を読書課題に選んだが、この授業でハーツホーンは、生まれてはじめて哲学書と呼ばれる書物を読むことになる。そしてこの書物の「共同体」の一節に、決定的な影響を受けた。利己主義を動機づけの原理とする考え方は誤っていること、つまり他人に対する共感がなければ、いかなる人格も意味をなさないことを痛切に思い知らされる。他人に対する関心ほど直接的、合理的なものは他にはない。この信念が、ロイスを超えて、ホワイトヘッド的・仏教的な人格概念へと収斂する。個々それぞれの瞬間に全ての人格は、様々な程度に先行の人格から影響を受けながら、それらの感情を汲み取る感じの海という共感の世界を構築する。利己主義ほど愚かな信念はない。これが、ハーヴァーフォード二年次のハーツホーンの確信であった。

ハーツホーンは、他にコールリッジの *Aids to Reflection* やシェリングの盗作に近いデキンシーの著作、メレディスの *Egoist*、フィールディングの *Tom Jones*、ウェルズの *Mr. Britling Sees It Through* などの著作に親しんだ。この小説はウィリアム・ジェイムズの「有限な神」に影響を受

けて書かれた戦記ものだが、ウェルズはこの有限な神によって、悪の存在が説明できると考えた<LD. p.120, IAH. p.16>。それは、ハーツホーンの関心をも引いた。しかしハーヴァーフォードの教養ある懐疑論者やニーチェ主義的な無神論者の仲間には、加わらなかった。彼らには訴えかける力がなかった。その理由の一端は、彼らの不快な個性と粗野な男性優位主義的立場にあった<IAH. p.15>と言う。

ハーツホーンが過ごしたハーヴァーフォードの二年間は、第一次世界大戦の時期に重なっている。そのようなこともあって、1,2年次の夏休みには、自発的に軍事訓練に参加し、模擬訓練に興味を感じたりしている。以前自分が信じていた平和主義やラファスの絶対的な平和主義、またトルストイの平和論の呪縛を離れて、いくらか緩い平和主義者になるのもこの頃である。このままでは、徴兵制が施行されるのは必死であったため、徴募兵になるか、あるいは陸軍が募っている看護兵のボランティアになるか迷った末に、ハーツホーンは結局、自分が平和主義者であるために受ける危険、なにより看護兵が必要なこと、病院での勤務にはある程度の自由時間が確保でき、読書ができることなどを勘案して<DL. p.124-5>、私的なボランティアの看護兵を選んだ。これが中途退学の一つの理由であった。またできれば今後は、ハーヴァード大学で教育を受けようという思いも、同時に彼にはあった。

IV 看護兵時代

こうして1917年から19年にかけて、ハーツホーンは看護兵としての生活を送っている。この期間に彼の思想はほぼ輪郭を整えた。極端に言えば、この二年間がなければ彼の思想はおそらく熟することなく終わったであろう。この二年間は思想家として自立する上で、決定的に重要な時期である<EA. p.xvi>。とりあえずこれだけ述べて先に進もう。

彼はイギリスで看護兵としての形式的な訓練を受けた後、フランスの Le Treport に移送された。この陸軍病院はイギリスの管理下に置かれていたが、前線からはほど遠く、爆撃機がときどき頭上を通過することと、負傷者が現にいるということ以外、戦場にいることを忘れさせる状況にあった。いくらか手持ち無沙汰のまま1週間が経過し、その後は伝染病患者の隔離病棟に配属されている。伝性病の罹患者に接していても、不思議なことに誰も感染しなかったと言う。この時代にハーツホーンが唯一身の危険を感じたのは、食事中に肉を喉に詰まらせて、危うく窒息死しかけたことぐらいであった<LD. pp.138-9>。自分では吐き出せず、友人が後ろから肋骨あたりを力強く押さえて、肺を動かし呼吸させるという方法で、何とか難を逃れた。肉による窒息死が比較的多かったらしい。戦争中とは言え、休憩時間には読書をし、傷病兵との会話を楽しみ、テントの中では仲間と哲学論議を楽しんだりしている。こうして表面的には比較的長閑な二年間を過ごしたかに見えるが、ハーツホーンの内面では、精神的な苦悩を伴う変化が生じていた。ノルマンディー付近の野戦病院での生活が彼の感性を研ぎ澄まし、思索を洗練させることになる。

夕日がイギリスの海岸線に向かって沈み始め、あたりに鳥と鴉の囀りだけが聞こえるなか、ハーツホーンはアメリカから持参したスーツケースから一冊の書物を取り出した。それが、ウィリアム・ジェイムズの『宗教経験の諸相』<Varieties of Religious Experiences>であった。この書物はウェルズの小説にも影響を与えており、既にハーツホーン自身も興味を持っていた。しかし直

接この書物を読むことで、それがこれまでに出会ったどの書物とも根本的に異なったものであることに気づいた。神秘的な経験に基づく信仰とそれらを合理的に説明しようとするジェイムズの態度に抑え難い興奮を覚えた<LD. p.148>。そして同時に、彼は有限な神という概念に新たな思いを抱くことになる。野戦病院の単調な生活が、彼にこれらの問題を熟考させる機会を与えた<IAH. pp.16-7>。こうして彼は、認識や倫理、神学の諸問題を色々考えることになる。認識の問題では、心身の二元論批判と感性優位の思想に思いを馳せた。世界はまず感じられ、その後に思考される。感覚作用は徹頭徹尾、情緒的であるというのが彼の信念になった。倫理の問題では、利己主義の単純な理論に見切りを付けて、人格の同一性や非同一性の問題が相対的でしかないことに思い至っている。また神学上の問題では、すべてが神の無限性によって説明されるという単純な主張を退け、神の有限性をも考慮する立場を採るようになる。神の全知全能、無限性や絶対性を素朴に信じることの不合理性を強く感じ、ジェイムズやウェルズらの「有限な神」という概念から大きな影響を受けた。しかしハーツホーンは、神の有限性を強調しすぎるジェイムズなどの有限主義の立場が信頼できる神学を提供しないことは、彼らの著作を読んだ後、ただちに気づいた<LD. p.17>。というのも、一つは、彼らが神を、宇宙全体の精神と見なさず、単に人間性という抽象概念から敷衍された超精神<supermind>と見なしていたため、もう一つは、生物以外の自然に心を認めない心身の二元論を信奉していたためである。ハーツホーンは一時的にこの二元論を受け入れたこともあったが、次のような個人的な経験を経て、二元論とは決別している。「ある日、フランスの素晴らしい景色を目にしていたとき、一つの鮮明な想いが脳裏をかすめた。それは又聞き知識ではあったと思うが、美は<客体化された満足感[pleasure]>であるというサンタヤナの言葉であった。私はこの言葉を自分なりに次のように解釈した。この満足感は、まずそれを経験している主体である私の内部に起こり、それからその経験の中の対象に投影されるようなものではない。美は、その対象の中にあるものとして与えられる。あるいはとにかくその種の感じはそのようなものとして対象から与えられると言ってよい。自然は、このような感じによって構成されるものであって、生命のない物質によって構成されるものではない。生命のない物質によって構成されるような自然は、思考の産物で、感覚の産物ではない。二元論者の言う物質は、決して一つの客観的なデータというようなものではなく、構成されたものである。我々に経験できたこともなく、またできる可能性もないような或るものの概念を一体どのように形成できるというのだろうか。もしこれが事実であって、神も同じであるとすれば、ウェルズの言うような人間性という抽象概念から敷衍される神は、同時に生命のない自然の超精神でもありうることになる。このことがあって以来、私はウェルズがジェイムズから借用した極端に有限な神という概念を真剣に考えることがなくなった。そしてもし形而上学にア・プリオリな知識が存在しないのだとすれば、不可知論こそが正しい選択だと考えるようになった>」<IAH. pp.17-8>。

看護兵としての二年間の生活で、彼は精神的に大きく成長した。通常では読書など思いもよらない戦場で、たとえ看護兵とは言え、充実した生活を送れたことは、ハーツホーンには幸運なことであった。戦場で勉強などできるはずはないという父の言葉<LD. p.126>を尻目に、母公認の生来の論議好きもあって、彼は読書や仲間との会話から掛け替えのないものを得た。「愛、共感、参入は、原子から神性までのあらゆるレベルの存在に適用される」という彼の信念は、後に出会うパーズやホワイトヘッドにも共通する考え方ではあるが、ハーツホーンはこれを、自らの経験とこれま

での読書とによって確信するようになった。エマーソン、ジェイムズ、ロイス、シェエリー、ワーズワースなどの影響も受けつつ、何よりも掛け替えのない看護兵時代のこの二年間の経験が、彼に生と死を含む哲学上の諸問題を自ら考えさせた。思想に決定的な影響を与えたこの時期は同時に、プラトニックな恋愛感情を育てる時期とも重なっている。男女の人間関係について、逞しく働く看護婦たちとの出会いから、性を超えた付き合い方ができるようになったと述懐している。不完全な人間<男>として、男性の付属品的な性として見られることの多い女という性に、独立した価値を認めるようにもなったようだ。

しかしこの時、思想がほぼ決定的な輪郭を取ったことから、一方では、現在でも心残りなものを失っている。それは、神人イエスに象徴されるような神学上の問題にはっきりとけりを付けたことである。アウグスティヌスの『告白』など通してキリスト論には触れていたが、中保者としてのキリストだけを通して神を知るという方法に、ハーツホーンは納得できなかった。人生を解く鍵は、神とキリストとの特殊な関係にあるのではなく、自然と人間との関係、人間を超えた宇宙的なものと人間との関係にあると思えたからである。結局、彼は、イエスを超自然的に扱うことを否定することによって、純粋なキリスト教に最終的な決別を宣告した。しかし「これは今でも寂しく思っている。もっと違った風に育てられてもよかったかも知れない」というのが、彼の偽らざる心境のようである<IAH. p.18>」。このような想いの背後には、「ローマ人への手紙」第3章21節との心情的格闘があったのであろう。「イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者ために罪を償う供え物となさいました。それは今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです」。しかしハーツホーンには、結局、パウロのように、「イエス・キリストの僕」だと思えることができなかった。奴隷になりきることができなかった。

1919年の夏は、ハーヴァーオフォード以来の友人であるフランク・モーレイとカリフォルニアで一時を過ごしている。束の間の休息である。キャンプやサイクリングを楽しみ、お金を稼ぐために町で見かけたアルバイト先で10Hばかり働いたりしている。また同時にバークレイにあるカリフォルニア大学に顔を出し、いくつかの講義にも出た。C.I.ルイスに出会ったのは、この時である。そこで当時まだカリフォルニアにいたC.I.ルイスのフィヒテとシェリングに関する講義を聴いた。この講義には感銘を受けた。このルイスには、2,3年後に、ハーヴァード大学で再び会うことになる。

V ハーヴァード大学と大学院時代

1919年の秋から、ハーツホーンはハーヴァード大学に通い出すが、ここで彼は、学部二年間と大学院二年間の合わせて四年間の学生生活を送っている。クラスメイトとは余り親密な関係を結ぶことなく、廃部になっていた自由クラブを再創設者の一員になって再興し、そこを生活の拠点に過ごすことが多かった。ハーヴァード大学には、既にジェイムズもロイスもサンタヤナもいなかったが、彼らの薫陶を受けた弟子たちはいた。ジェイムズの弟子で激しい観念論批判を行っていたR.B.ペリー。ロイスの弟子でジェイムズからも大きな影響を受けたW.E.ホッキング。彼は観念論者たちのカリ

スマ的存在であった。同じくジェイムズとロイスの弟子で、カリフォルニアで既に面識のあったカント学者、形式論理学者のルイス。イギリス思想講座の教授で母方の名にちなんで付けられたジェイムズ・ホートン・ウッズ、H.W.シェファール、レヴィ・ブリュル、レオナード・トロランドなどの講義を聴いている。

当時のハーヴァード大学の哲学は、新實在論に立って観念論を激しく批判していたペリーやルイスたちと観念論を積極的に押し進めていたホッキングとに二分されていた。ペリーは、ハーヴァード公認のジェイムズ主義者ではあったが、徹底した決定論の立場を採り、かつ大胆な観念論の批判者であった。その批判には難点もあったが、潔く反観念論主義を標榜する姿勢には共感を抱かれていた。一元論に対する批判も厳しく、「一元論者は全てのものの中にジュースか何かがあると考えている連中だ」＜DL. p309＞というあられもない批判をおこなっている。このペリーについては面白い逸話が残されている。「講義の始めにはいつも大きな黒板に巧みな整然とした講義のアウトラインを書くのが習わしであったが、いつも通り二枚の黒板にびっしり諸説を並べ終えたペリー教授に、ある学生が「先生はどの立場を信じているおられるのか」と質問すると、教授は些かもあわてず、それはよい質問だ。私がそれに応えたとして、また私がその一つに自分の名前を書いたとして、それで一体それらの諸説にどのような相違が出るというのか」と言い返し、質問した学生を些か混乱させながら授業は始まった」＜DL. p309＞。

C.I.ルイスには既にカリフォルニアで会っているが、自伝『光と影』の第十三章「有名な哲学者たちの思い出」には名前が最初に挙げられるほど、ハーツホーンに影響を与えた人物である。ルイスの授業は、先にカリフォルニアで聴いたフィヒテとシェリングの講義をはじめ五つを受講している。ハーツホーンは元来、論争好きで時に人の気分も損ねることもことがあったが、ルイスは対照的に如才のない人物で、ハーツホーンが理想の教師として敬意を表した人物でもあった。政治的には、ルイス自身の言葉を借りれば、「知的な自由主義者＜intelligent liberal＞」であった。いかにもウイットに富んだ表現だが、実情は保守主義者であった。このような表現を好むことから窺われるように、万事に穏健であった。ハーツホーンが急進派の人々を前に演説をした際にその反応の恐ろしさにぞっとしたことを話すと、ルイスは「私はもうだいぶ以前に社会主義者の集まりで攻撃されても、腹を立てないでいる方法を会得しました。ただ待っていればいいんです。ほっとおいてもやがて攻撃した人も攻撃される羽目になるのですから」と言ったという＜DL. p.307＞。ルイスは、才能に恵まれながらも非常に謙遜な人物であったが、自分が理解の遅い人間であることを「アリゾナの砂漠が美しいと理解するのに二度横断しなければならなかった」とちゃめっ気な表現をしている＜DL. p.308＞。

ルイスは、科学理論では方法論的行動主義者の立場を採りながら、行動主義と心を否定する唯物論とはまった別物だという見方に立っていた。ルイスによれば行動主義者は正しいし、彼らには考えがあると見なされた。しかしハーツホーンはこのルイスの言葉に、次のように応じた。「ただそれだけで、彼らには他に何の考えもない」＜DL. p.307＞と。これに対して「それだけ言えば充分でしょう。もう止めましょう」というのが、ルイスのコメントであった。論争好きなハーツホーンと穏健なルイスとのやり取りが目につく逸話である。

ホッキングはハーツホーンの博士論文の口頭試問を担当した教授だが、その一連の形而上学の講義はつとに有名であった。ハーツホーンは、他に古代哲学史と現代哲学史とを受けている。彼はこ

の二つを同じ学期に同時に受講することによって、新たな思想に出会い、自分に似た考えや自分には曖昧にしか考えられなかった思想が明確に述べられている現場に出会うことができた<IAH. p.20>。もっともホッキングの詩的な直観力には深みを認めていたが、その論理は厳密ではなく不満を感じていた<EA. p.xv>。

ジェイムズ・ホートン・ウッズは当時ハーヴァード大学の哲学部長を務めていたが、ハーツホーンとは、ホートンという名が母方の富豪の祖父、James Haughton にあやかって付けられていたこともあって、比較的緊密な親交を結んでいる。ウッズは、ホワイトヘッド夫人に「彼は聖者です、ただしヤンキーのね」と揶揄されているが<DL. p.161>、インド研究に情熱を燃やすサンスクリット学者であった。彼はまたホワイトヘッドの夢を実現させた一人で、ホワイトヘッドがイギリスからハーヴァードの哲学科の教授として迎え入れられる際に尽力した人物でもある。如才なく、面倒見がよく、博識で、創造力にも富んでいた<DL. p.161>。このウッズがハーツホーンの哲学研究の助言者になり、友人になっている。彼からはギリシャ哲学の講義を聴いた。

ウッズの人柄の一端を忍ばせる次のような逸話が、ハーツホーンによって残されている。ローエルが学長に就任し、教員の給与体系を一律にするまでの一、二年間、哲学科の教員は他の学部の教員たちよりも給与がよかったようだが、これは、ウッズが労を惜しまず哲学に興味のある知人の富豪から財源を手に入れたものと言う<DL. p.161>。またハーツホーンが留学を前に、これこれの奨学金を得ようと思うと告げた際には、ハーヴァードの学生が博士号取得後の研究のために与えられる奨学金制度<Sheldon Fellowship>を紹介し、結局その奨学金でヨーロッパに留学している。この時ウッズは、バーナード・ボーズンケットより F.H.ブラッドリーを読むように、そしてこれからは論理学が重要になると忠告することを忘れなかった。この忠告にハーツホーンは後年感謝している。

H.M.シェファースは感情的に問題の多い人物であつたらしいが、論理学者としては一流であつて、ハーツホーンは彼からシェファース流の論理学を教授されると同時に、イギリス経験論に関する素晴らしい講義をも聴いている<IAH. p.20>。論理学については、このシェファースとルイスとから多くを学んだようだ。ハーツホーンはこの両者の授業をもっとも多く受講している<EA. p.xv>。

レヴィ・ブリュルは、*The Mentality of Primitive Man* の著者として有名であつたが、招聘教授としてハーヴァードでも講義を行っている。彼の講義は、観念論を主体にしたものであつた。例えば、デカルトの「我を思う、故に我あり」は、「主体がなければ対象はありえない」という意味であつて、まさにこれは現代の観念論の起源に他ならないという調子であつた<DL. p.160>。ハーツホーンは、既に看護兵時代に二元論には無理があることに気づいていた。この時ハーツホーンはおおよそ次のように考えていた。つまり「どのようなものもそれが対象として扱われるためには、何らかの主体が存在しなければならない。しかし主体にはそのような必要性はまったくない。人が賞賛されるには、賞賛する人間が必要になる。しかし賞賛する人間にはそのような必要性はない。また対象であるために自分以外に特別何かが存在する必然性もない。主体ですら、他の主体の対象になりうるし、それが知られたり経験されたりするものであるなら、当然他の主体の対象とならねばならないはずだからである。正しい観念論とは、具体的、個的な対象は全て主体の別名だという主張である」<DL. pp.160-161>。主体の本質を精神に置けば、「精神が実在の普遍的原理である」という主張に行き着く。ハーツホーンが自分の信念に新たな解釈が示されたと歓喜したのももっと

もであった＜DL. p.160＞。

このブリュルには、最終講義の際に友人としての付き合いを認められて、後にヨーロッパ留学に行った際にはフランスに立ち寄り親好を暖めている。何を研究されるのですかという間に、ハーツホーンは形而上学に関する問題ですと答えている。それに対し、彼は、ヒュームのことを考えると、その余りの深さに驚くばかりだと述べ、いずれにせよ「試みる価値は充分にある」と優しく付け加えたと言う＜DL. p.160＞。敬するに値する人物であった。

レオナード・トロランドは心理学の教授であったが、彼には崇拜者と言えるほど心酔したらしい。ハーツホーンの処女作 *The Philosophy and Psychology of Sensation* は、この心理学者トロランドなくしては考えられないほどの影響を与えた＜IAH. p.21＞。彼はまた心理学の側面から博士論文の口頭試験官にも参加していた。彼に原子その他の物質についてどのように考えるかと質問され、汎心論的に答えると、私もほぼ同感だと答えたことと記している＜DL. p.163＞。哲学者が物質を汎心論的に捉えることは当時では珍しいことであつたし、トロランド自身もそのような立場を公にはしなかったが、この口頭試問でのやり取りに、ハーツホーンはトロランドの真意を見たと感じた。

ハーツホーンとハーヴァードの教授たちとの関係はおおよそ以上のようなものであった。論争を好む性癖もあって、この多彩な教授たちとはもっと激しい論議や会話を交わしたにちがいない。彼自身は教授たちとの関係や博士論文を控えた当時の思想状況を *The Library of Living Philosophers* の自伝には以下のように簡略に記している。

「ホッキングは、形而上学上の諸問題に関する私の関心を深めることに助力を惜しまなかったし、ルイスはフィヒテについて書いた私の論文に暖かい好意を寄せてくれた。ルイスとペリーは、ホッキングのように余りに安易に自分の信念を形成することの危険性を教えてくれた。ルイスはまた、実在がある絶対不変の、相互に包含的な体系である可能性はないと主張していたが、この考え方については現在でも正しいと、私は思っている。ペリーは、ホッキングとはまったく逆に、外的関係を普遍なものに見なす極論に走った。ホッキングは、ロイスのように内的関係を無制限に認める主張には誤りがあることをジェイムズから学んだが、同時に神にも未来は未定であることを認めていたし、自由主義的な意味での自由も認めていた。私は、私なりに関係理論を色々考えていた。つまり多くの場合、たとえ全ての（あるいは両方の）項にとってではなくても、いくつかの項にとっては厳密に外的であり、一つの項にとってはまったく内的であるような関係理論を考えていた。その理論は、決して満足のいくものではなかったと思っているが、しかしこの理論によって、ラッセルやヒュームに見られる極論やブラッドリーやロイス、晩年のブランシャードに見られるラッセルらとはまったく反対の極論とが両方とも回避できた。このような努力が、私にパースやホワイトヘッドに対する関心、とりわけ極めて明瞭にこれらの極論を廃していたパースへの関心、を抱かせる契機となった。

心身の二元論については、既に看護兵としてフランスに滞在していた間に私なりの解決に達していたが、この見方を積極的に押し進める力になったのは、ホッキングの観念論ではなく、直接的には心理学者のL.T.トロランドであった。私は彼の講義を受けていたし、後に出版される感覚に関する私の著作に決定的な影響を与えた。トロランドは確信を持った心靈主義者で、フェヒナーに

影響を受けていた。博士論文の口頭試問の際に、「この点については私と同じ考えであると語った」。
 <IAH. p.21>

これまでは主に、ハーツホーンとハーヴァードの教授たちとの関係を中心に見てきたが、彼自身も述べているように、彼がもっとも影響を受けたのは、人物ではなく書物であった<*Existence and Actuality*, p.vx>。十五歳の時に「何かを知りたくなったら、時間を見つけて本屋に行くか設備の揃った図書館に行くこと」。これが書物との出会いを何より大切にするハーツホーンの信念であった<*DL*, p.198>。キャンピング入門や鳥の書物との出会いが彼の人生を変えたことが書物との出会いを決定づけた。同じような出会いがこの時代にも起こっている。ジェイムズの‘The Dilemma of Determinism’は、ハーツホーンを完全に非決定論者に変えた書物であった<*EA*, p.xv>し、似たことは後年、パースの‘Doctrine of Necessity Examined’にも言える。

比較的革新的であった牧師の父やハヴァーフォード・カレッジ時代の読書、看護兵としてフランスで過ごした二年間の思索、ハーヴァード大学の教授たちとの論議や指導、書物などの影響を受けつつ、ハーツホーンは博士論文‘The Unity of Being’（肝心の博士論文のタイトルが定かではない。*Living Philosopher*の自伝ではThe unity of all things (in God)と小文字で書かれ、「全ての事物の統一性」に関する論文というように曖昧に表現されている）を書き上げ、ホッキングとトローランドの口頭試問を受けることになる。なお当時のハーヴァード大学では、哲学博士になるには心理学の試験にも通る必要があった<*DL*, p.161>。心理学者のトローランドが試験官に加えられているのは、そのためである。

ハーツホーン自身によれば、「博士論文は、素晴らしく大胆で包括的な意図を持って書かれた。ハーヴァードの教授たちが教示してくれた哲学上の様々な問題—例えば、内的関係と外的関係の問題—に関して、それぞれの論証を吟味して自分なりの考え方を述べたもの」<*EA*, p.xv>らしい。この論文は公刊されていないので何とも言えないが、彼自身は、後の著作の大半はこの論文で示した考え方に既に見られるものだと言っており、それが自分の思索によって生み出されたものであることを強調するために、そこにはパースの名もホワイトヘッドの名も出ていないはずだと言う。彼の記憶では、当時まだパースの著作は何も読んでいなかったし、ホワイトヘッドには面識もなく、彼の形而上学に関する著作にも目を通していなかったようだ<*EA*, p.xv>。ただしホワイトヘッドの *The Concept of Nature* の一部は既に読んでおり、この書物によって彼は、実在が過程であって単なる存在ではないことに気づかされていた。もっとも博士論文を発表する以前にも彼は、授業の提出論文として‘The Self Its Own Maker’を書いていたと言い、ルキエやホワイトヘッドを知る以前に、「汝は私を私自身の創造者として創造した」というルキエの言葉や「自己創造的創造者」というホワイトヘッドの言葉に似た概念を使っていたことも合わせて述べている<*IAH*, p.21>。いずれにせよ、その論文にパースやホワイトヘッドの主張と矛盾するようなことが述べられていないとは言え、それは同じような影響や世界の状況がそうさせたものであって、偶然に近い見解の一致だと言ってよいという。

VI ヨーロッパ留学

1923年から1925年にかけて、ハーツホーンはシェルダンフェローシップを得てヨーロッパに留学

する。主にドイツを中心に、イギリス、オーストリア、フランス、オランダ、イタリア各地の大学を廻った。彼が講義を聴いたり、談話したりした人物は、オーストリアではモーリツ・シュリック＜Moritz Schlick＞、ハインリッヒ・ゴッペルツ＜Heinrich Gomperz＞、フランスでは例のルシアン・レヴィーブリュル＜Lucien Levy-Bruhl＞、エドモンダオ・ル・ロイ＜Edouard Le Roy＞、ルシアン・ラベルトニエ＜Lucien Laberthoniere＞、イギリスでは、アレキサンダー＜S.Alexander＞、コリングウッド＜R.G.Collingwood＞、ホルダーン＜J.S.Haldane＞、ムーア＜G.E.Moor＞、スタウト＜G.F.Stout＞、ハロルド・ジョアキム＜Harold H.Joachim＞（このジョアキムとは興味ある会話を楽しんだ。善良な人物だと感じた様子だが、彼の著書‘Truth’の考え方には誤りがあると言う＜IAH. p.22＞）。ドイツではリチャード・クロナー＜Richard Kroner＞、オスカー・ベッカー＜Oskar Becker＞、ジュリアス・エビングハウス＜Julius Ebbinghaus＞、マックス・シェラー＜Max Scheler＞、マックス・プランク＜Max Planck＞、アドルフ・ハルナック＜Adolf Harnack＞、ジョナス・コーン＜Jonas Cohn＞、エドモンド・フッサール＜Edmund Husserl＞、ハイデガー＜Heidegger＞、ポール・ナトルプ＜Paul Natorp＞、ニコライ・ハルトマン＜Nicolai Hartmann＞、ツェルメロ＜Zermelo＞らである。

現象学者のフッサールをはじめ、実存主義者のハイデガー、観念論者のクロナー、ナトルプ、リッケルト、プラトン主義者のヨナス・コーン、カント主義者のエビングハウス、物理学者のプランク、数学者のツェルメロなど、いずれも当時のヨーロッパを代表する思想家たちであった。

もっとも先に述べたように留学期間の大半はドイツで過ごされた。その当時のフライブルク大学の状況はどうであったか。ハーツホーンは次のように認めている。

「もっとも長く滞在したのは、ドイツのフライブルクであった。そこではフッサールがもっとも有名な哲学者であったが、彼以外の四、五人の教授から多くを学んだ。有名な数学者のツェルメロにも会う機会もあった。ツェルメロは私と同様に、フッサールの考え方には懐疑的—当時ハイデガーの名声はドイツ本国を越えて広がりつつあったし、既にフライブルク大学内部でもフッサールに対抗する力ないし凌ぐ力を持ち始めていた—であった。私がドイツを去る前に、ハイデガーはマールブルク大学に職を得たが、私を含め彼と共にマールブルクに行った学生もたくさんいた。ナトルプはまだ健在であったが、およそ一年後くらいには死去された。ニコライ・ハルトマンもフッサールに劣らず有名であった。これらの教授たち全てに少なからぬ関心を抱いたが、結局、ハーヴァード大学の恩師たちや後年影響を受けたパースやホワイトヘッドほどに私を引きつけた人物はいなかった」＜DL. p.172＞。

この留学で、彼はフッサールやハイデガーたちの哲学を知るが、留学で得た知識はおおむね大した影響を与えることはなかった。ハーツホーンの表現を借りれば、ヨーロッパはまったく全てにわたって既有知識の反復でしかなかった＜DL. p.172＞。例えば、フッサールやハイデガーについても、「フッサールには何度も会いに行ったし講義もよく聴いた。初期の著作とりわけ『イデーン』については丹念に読んだ。ハイデガーにはめったに会いに行かなかったが、講義はよく聴いたし、彼の初期の著作もいくつか読んだ。しかし両者とも私を満足させなかった」＜IAH. p.22＞と述べている。ハーツホーンには、判断を中止し所与に注意を集中すれば、絶対的な明証性が得られるし、

明晰判明に事態を述べることもできるというフッサールの基本的な思考プログラムは、余りに素朴すぎるように思えた。一方、ハイデガーはフッサールほど素朴ではなかったが、彼の講義は大半が、既に私も知っていることを銜学的にさも重要なことのように述べる場合が多かったと言う <IAH. p.22>。もっともドイツを離れヨーロッパ各地を点々として再びドイツに帰ってきた頃には、現象学的探求が取るべき方向は、フッサールとは逆に、ハイデガーに近い方向にあるという想いを持って帰ってきている <IAH. p.23>。認識論的に言えば、ハイデガーの「世界内存在」には、フッサールにはない感覚知覚と感じとの区分がうまく捉えられていると、ハーツホーンには思えた。果物や他の砂糖菓子の甘み（感覚知覚）は、ある有機体がそれを食べた時に「うまい」と思う感じのことである。馬でさえそのような感じは持つだろう。同様に苦みは食べて「まずい」と思う感じである。ハイデガーに同感を抱けたのはこのような独自の認識があったからだが、この認識自体は、既に看護兵時代に自ら考えついたものである。既に哲学や神学の諸問題に自分なりの見解を持っていた思想家ハーツホーンとしては、結局、留学で得るものはなかったというのが実感であった。

フッサールにはまったくユーモアが欠落していたし、ハイデガーにはその尊大な口ぶりが災いしてか、会いに行くこともほとんどなかった。蛇足だがフッサールについては、フッサール夫人の言葉が当時の伝説として残されている。彼女がライルに「私の主人はプラトンと同程度に偉大な人でしょうか」と訊ねると、ライルは「そうは思わない」と応え、「ジャカントと同じ程度でしょうか」と聞くと、ライルは「分かりません」と応えている <DL. p.177>。夫人はどうであれ、ハーツホーンには余り魅力のある人物ではなかった。

ハーツホーンは、時には他人からの影響を必要以上に大きく語る場合もあるが、その場合でも決して自分が一個の思想家であったことを主張するのを忘れない。影響は素直に認めつつ、一方では自分自身の思索による成長を強く主張するのがハーツホーンの変わらぬ姿勢である。いずれにせよ二年余りの留学がまったく無益であったわけではない。何事であれ学ぶべきいかなる知恵もないと断言するのはあまりにも愚かであろう。ハーツホーンは、ハイデガーの講義に出席して、ある意味では歴史的瞬間とも言えるような出来事に遭遇している。1924年のある講義の冒頭、ハイデガーは「この講義にはく本質直観>はまったく出てきませんよ」と述べたと言う <DL. p.316>。ハーツホーンは、これをフッサールからの独立宣言と受け取った。目前に迫った新たな時代の緊張感が感じ取られる一幕に出会えたということ自体、また彼がこれをことさら書き留めていること自体に、その影響力を感じ取ることも可能である。

また当時新進気鋭の講師であったエビングハウスとは、その後も親交を続ける間柄になっている。晩年のエビングハウスはハーツホーンのいたエモリー大学で講義する機会を持ったが、当時のエビングハウスは、社交好きで、授業外では哲学の話をすることを嫌った。授業中は、軍隊を指揮する指揮官さながらに厳しいものであったらしい。授業では、学生はただひたすらエビングハウス（カント）の知っていることを学ばされた。こんな逸話を伝えている。「ある時優秀な学生が思い切ってアキナスについて述べられたエビングハウスの意見に異議を申し立てようとすると、その軽率な学生は言葉を制止された。しかしその学生は次の授業にアキナスの『神学大全』を持参して、私の言いたいことをこれであなたに伝えたいと主張。しかしエビングハウスは彼を直ちに押し止め、私は教授であって、あなたは学生だ。私はあなたに教えてもよいが、あなたは私に教えてはいけない」 <DL. p.319>。老人の頑なさと言えばそれまでだが、いかにも古き良き時代の威厳に満ちた

教師像を彷彿とさせる逸話である。

VII ハーヴァード大学の講師時代

哲学の先進諸国であったヨーロッパ留学では、旧知のブリュルとの再会や、錚々たる思想家との出会いはあったものの、総じて決定的な影響を与えた人物、思想には出会えなかった。こうしてハーツホーンは1925年再びハーヴァード大学に戻った。1928年までの3年間は、自らの哲学を洗練、深化させる貴重な期間にあたっている。看護兵時代が第一の転機だとすれば、これはまさに第二の転機にあたる時期であった。看護兵時代の思索がなければ、彼の思想は熟さなかったろうが、二人の天才との出会いがなければ、彼の哲学体系は体をなさなかったはずである。

「私はしなければならない3つの仕事を授けられてハーヴァードに戻ってきた。一つは、講義を担当するため、もう一つは、ホワイトヘッドの形而上学の講座で、採点助手を務めること（この時はじめて彼はホワイトヘッドの講義を聴いた）、最後の一つは、チャールズ・パースの著作集公刊に向けて、既に公刊されたものを含む全著作の編集作業に従事すること、であった。まったく幸いにも—このどれもが私自ら求めたものではなかった—、ほぼ同時に、アメリカで偉大な仕事を成した二人の天才的な思想家の思想に晒されることになった。これには得ることが多かったが、これら二人の偉大な思想家の専門知識や洞察を幾分なりとも自分のものにするには相当の時間が必要であった」＜IAH. p.24＞。

ハーヴァードに帰ったハーツホーンは、早々に講演を依頼された。これが留学経験者に課せられていた当時の慣例であった。ヨーロッパでの経験と印象を話してほしいという依頼に応じ、彼は、はじめて多数の専門家たちを前に講演を行った。演題はフッサールに関するものであった。フッサールの本質直観や彼のデカルトまがいの合理主義などについて話したようだが、内容は定かではないらしい。「キリスト教の意義は＜十字架の意味＞を確定することにある」というハイデガーの一文を引用したことだけはよく覚えているという。自分では冷静に講演を行っていたと言うが、ペリーからもう1時間30分も話していると言われて驚いたりしている。ドゥオルフ教授が飛行機に間に合わなくなるというのがその理由であった。

講演の後、ホワイトヘッドが丁寧に直接ハーツホーンに語りかけ、フッサールが本質を強調していることや彼のデカルトまがいの合理主義に驚いたことなどを話したという。またハーツホーンが、ドイツ語は哲学上の観念を余りに安易な用語（例えば *Umwelt* や *Mitwelt* など）で表現するために哲学上の真理を取り逃がす傾向にあると指摘したことに、ホワイトヘッドは賛辞を送っている。ホワイトヘッドが後に独自の思想を表現する言葉を見出すのにどれほど苦心したかは、彼の主著 *Process and Reality* を見れば明かである。いずれにせよ、ハーツホーンがホワイトヘッドと直接話をしたのはこれが最初のようなのである。

ホワイトヘッドがウッズらの配慮でハーヴァード大学哲学科の教授として迎えられたのは1924年、ホワイトヘッド六十三歳の時である。その翌年の1925年には哲学者としてはじめて書いた著書 *The Science and the Modern World* が大きな話題を呼んだ。ハーツホーンがホワイトヘッドの助手

としてハーヴァードに帰ってきたのは、このような時であった。自分でも講義をしながら、ホワイトヘッドの助手として試験採点をする一方、次々に出版されるホワイトヘッドの著作を読みふけた。渡米後のホワイトヘッドは続々と著作を公刊していた。1926年には *Religion in the Making* を、1927年には *Symbolism* を相次いで出版し、主著 *Process and Reality* への準備を着々と進めていた。この時にハーツホーンが読んだ書物は、*Religion in the Making, Symbolism, Its Meaning and Effect*（この著作については学生雑誌に書評を書いている）、*Science and the Modern World* である。

ハーツホーンは、これらの著作に接しながら、六十歳をすぎて生活にも思想にも新たな冒険を試みるホワイトヘッドに大きな衝撃を受けた。「ホワイトヘッドの人柄には深く感銘した。これまでに会ったどの天才的な思想家にも見られないほどの完璧な人格であった」〈IAH.p.25〉と言い、「熱烈な支持者になった。批判するより受け入れようとする気持ちの方が強かった」〈PH.p.〉とさえ告白している。自己主張の強いハーツホーンですらこれほどまでに言わざるをえない状況にあったと想像される。

一方、同時にポール・ヴァイス（ヴァイスはハーツホーンより4歳若く、編集責任はハーツホーンに委ねられていた。パラグラフに数字を打つことは、ヴィトゲンシュタインの *Tractatus* を参考にヴァイスが考えた。ヴァイスは後に *Metaphysical Society* 並びに *The Review of Metaphysics* の創設者になっている。）との共編で編集作業を進めていたパース自身にも、「これまでのどの恩師にも抱かなかったほどの感銘を受け」〈IAH.p.24〉ていた。まさに彼の生活は、二人の天才を相手に異常な興奮状態にあったものと考えられる。なおこのパース著作集は、ハーツホーンがシカゴ大学に移籍した後の1931年にハーヴァード大学出版局から1,2巻が出版され、1934年に5,6巻が公刊されている。

ハーツホーンは *Whitehead's Philosophy* という書物の第1章序文において、両者への心酔を表明した後、彼らとの「予定調和」とも言うべき思想の類似性を三つ挙げている〈WP.p.2〉。一つは、既に1922年頃に「The Self Its Own Maker」を書いていたこと。この概念は、パースの「自発性」ないし「第1次性」のカテゴリー、またホワイトヘッドの「創造性」ないし「自己創造的被造物」のカテゴリーの一般化を受け入れる内容のものであったこと。もう一つは、倫理の根本原理は愛であり、自己愛はこの原理の一つの現れにすぎないこと、つまり利他主義の正当性を利己主義によって基礎づけることは形而上学的迷妄であるとする論文を既に書いていたこと。最後の一つは、人格の不死性を宗教の中心問題とする考え方には早くからけりを付けていたこと、すなわち我々の永遠性とは、現世での生活が世界の詩人（創造者）である神のうちに織り込まれる過程の中にあるのであって、死後の歩にはないと考えていたこと、である。しかしはっきりとハーツホーンが影響を受けたと言える観点もある。それは彼自身が述べているように〈DL.p.182〉、現代科学の意義と東洋的観念の持つ意味であった。現在がまさに思想的混沌から抜け出すべき新たな時代になっているという認識を強く抱いた。思想全体の奥行きと重みを両者から学んだと言ってよい。これは、博士論文にもそれまでの諸論文にも見られなかった視点である。

このように思想的には一種の興奮状態にあったと考えられるが、ハーツホーンの教師としての一面はどうであったかという、自分が着任する前に既に講座が決められていたこと、学生が少ない上にまともな学生が受講していなかったことなどもあって、講義は最悪の状態だったと述懐してい

る<IAH.p.26>。まだまだ教授技術は未熟だったようだ。

こうして3年が経過し、共編者のポール・ヴァイスは、ハーヴァード大学にそのまま留任したが、ハーツホーンはシカゴ大学に転任する。学校当局から、「あなたには職はない」と知らされている。不本意な転出であったことは間違いない<IAH. p.37>。転任の事情についてはほとんど何も分らないが、転任後もハーヴァード大学からはまったく何の着任依頼もなかった。ホワイトヘッドの話として、当時のハーヴァードには2つのグループがあったとだけ語られている<IAH. p.26>。ハーツホーンの心境は複雑であったろうが、所詮、人事は水もので、それに合理的説明などあるはずがないというのが、ハーツホーンの想いであった。遺伝子か環境かという論議を絡ませながら、遺伝子はほとんどまったく関係がなく、環境が全てだというのは、それが証明できない以上愚かな主張だと述べている<IAH. p.26>。要は、ただ一方が残り他方が去った。ただそれだけのことにしたいというのがハーツホーンの偽らざる本音なのかも知れない。いずれにせよ、ハーツホーンの生来の論議好きがわざわざいしたと想像できる結末に終わっているのは事実である。

VIII-1 シカゴ大学時代

1928年10月、ハーツホーンはハーヴァード大学を去って、ともかくも唯一誘いのあったシカゴ大学に着任した。そこではじめて彼は、フルタイムの教員としての勤務に就く。その後1955年までの27年間シカゴ大学に留まった。ハーツホーンは、このシカゴ大学時代に、生涯の伴侶ドロシー・エレノア・クーパーと結婚している。これが、彼の言葉を援用すれば、「シカゴで過ごした27年間のうちで、ドロシーとの結婚に至る出会いほど私に大きな影響を与えたものはない」と言われる時代の始まりである<IAH. p.27>。

ドロシーは、ウェルズリ大学の一年次に変形子宮<tilted womb>の手術をして死にかけた経験がある。呼吸停止の状態に陥ったらしい。ハーツホーンも看護兵時代に肉を喉に詰まらせて死にかけているが、このような二人の経験を察して、ハーバード大学時代にプラトン学者のロナルド・レヴィンソンが二人を引き合わせた。実際に会ってみたが、彼女は才女だというレヴィンソンの言葉を信じて、ハーツホーンはドロシーのシカゴの実家に出向いている。はじめて会ったときにはドロシーは下を向いたままで、顔もよく見ることができなかったようだ。その時にはまだ二人がお互いに必要な人間であることを感じ取れなかった<DL. p.211>が、ドロシーはまったくレヴィンソンの言う通りの人物であった<DL. p.212>。そのほぼ半年後、ハーツホーンはドロシーの手紙に返事を書いている。日付は1926年12月14日、ケンブリッジ、マサチューセッツとある。これは、ドロシーが哲学の勉強にはどのような書物を読めばいいかを訊ねた手紙に応えたものである<DL. p. 178>。

「哲学の研究を続けたいとのこと嬉しく思います<彼女はウェルズリーで哲学の講座をいくつか取っていた>。続けて勉強される価値は、充分にあると信じています。というのも、最近の哲学の著作は大半が現代思想に不可欠な事柄について正当な認識ができなくなっています。科学を一つ修得してみたところではほとんど何も役にたたないのが現状でしょう。例えば（あなたが経験されたように）現代科学は3百年以上にも互って哲学思想を混乱させてきました。これは、一つには、確か

に科学は諸々の結果を出してきましたが、科学で実際に何をなせばよいかについて科学自身が（少なからず）混乱に陥ったこと、もう一つは、哲学者たちが躊躇することなく2つのことをしたために起こった混乱です。その2つとは、(1) 新たな状況に要求される変化を誇張しすぎる余り、あまりに性急に伝統的な諸概念を無価値なものとして放棄してしまったこと、(2) 哲学者たちの無意識な前提として、伝統的な思考法・・・にはもはやまったく新鮮味がないと考えたこと、です。現在では科学も、例えば動く力のない物質の塊という概念が根本的な原理でないことに気づきはじめていますし、今後は唯物論的な思考にもそれほど騙されなくなるでしょう。また更には、伝統的な形而上学は現代の経験科学に合わせるために、少しずつ修正を繰り返して三世紀になりますが、その努力の甲斐あってようやく形而上学の伝統の中で何が実際に私たちの仕事に直接関わるものであるかを知ることができるようにうにもなりました。一面的な急進主義も保守主義も共に信用を失っています。このようにすべてがある新たな総合に向けて動いています。それは、ギリシアやインドや中世の古典時代の人々だけが知っていたような総合ですが、現代が目ざす総合にはこれまでの時代には知られなかった側面が一つあります。それは、確固とした厳密科学の基礎の上にたった総合が可能だという点です。これが興奮せずにいられるでしょうか。

また哲学者は、世界全体を相手に色々論議をすることが可能です。＜ハーヴァードで行われた＞哲学会では世界のほとんどの国が参加していました。聖パウロによってキリスト教が地中海世界・体に広められた状況が、今日、世界全体＜平和と交通の安全、一定の言語、特に英語の広がりなど＞にまで広がっています。私は、きっと宣教師たちが次世紀には夢想だにできなかったことを実現してくれるものと信じています。彼らは、現在でもおそらく既に一般に知られている以上のことをなしていることでしょう。トルコのある学生は、民主主義が移植されればマホメット教は致命的な打撃を受けるだろうし、引いては、民主主義の宗教、つまりキリスト教の実現へと導くものだと言ったのを覚えています。現在ではこのような見方は、東洋人が私たち以上に見抜いているように、私たち自身の宗教に内在する余りにも極端なヨーロッパ主義を危険なものにするだけでしょ。だから私たちも何らかの仕方で伝道の努めを果たさねばなりません。哲学では・・・よろけつつも倒れない唯物主義がもう一つの脅威に晒されるはず。つまりヒンドゥー教徒です。このキリスト教徒とヒンドゥー教徒の両者が先の会議ではその点をうまく指摘していましたし、私たちの抱える伝統的な諸問題とその解決策の大半が、ヒンドゥー教の思想と見事なまでに類似しているのは、私のささやかな東洋思想の知識からでも明かです。そのような思想が私たちの考え方のどこに普遍的な要素があるかを現実を示す手助けになるものと私は願っています。東洋人との相違がどこにあるかを示すことは私たちの努めですが、それを東洋人には見られないある種の明確な洞察力の源泉に基づいて、つまり私たち西洋人だけが持っている様々な科学に力点をおいて行うべきでしょう。それは同時に、ホワイトヘッドとパースの重要性―彼らに代わり得る第三の人間はおそらくいないでしょう―を示すことでもあります。彼らは、これらの科学を自らの哲学の根本に据えつつ、かつ物理学よりも深い地平に立って、これらのことをひたすら考え感じてきたすべての人々とも調和を計りながら、中心問題となる諸観念に公平な判断を下してきました。余談ですが、ホワイトヘッドの講義に出ていた中国人は、それを最初のレポートで巧みに仕上げていました。現在は哲学を勉強する絶好の機会です。と言っても、この大いなる混沌の時代から抜け出ようとしてのことですが。もしあなたが、大方の人々のように、半ばしか抜け出ていないような、あるいはほとんど抜け出て

いないような哲学者たちの著作を読むようなことにでもなれば、抜け出ることが難しくなるでしょう。こんな事情なので、あなたに即座にアドバイスしにくいのです。パースは、理解するのにかなり暇がかかりますし、ホワイトヘッドも、彼の体系について単なるスケッチ以上のものを私たちに提示する必要があります。しかし彼の新著 *Religion in the Making* は他の著作 <*Science and the Modern World*> と一緒に読めば、ある程度有益です。もっともかなりの部分が驚くほど凝縮されて述べられています。パースに関しては、まだ絶版でなければ、<モリス・コーエン編集の> *Love, Chance, and Logic* がいいかもしれません。カントは、何らかの講義との関連で読まない限り、もっぱら哲学専門の学生に向いていると思います。というのも、彼の思想の大半は、もう現代ではかなり時代遅れになっているからである。同じような意味で、例えばプラトンは時代遅れになっているとは言えません。カントは非常に限られた当時の科学に依拠していました。カントは結論を確信した発言をするほど大胆ですが一人を制限するもっとも確実な方法は最初の言葉だけで止めること、そうしておいて彼の論議が保証する以上に明確かつ完璧であろうともしています。プラトンは、誰もがしなかったように、このようなことをやっていません。カントは扱いにくい作家です。明確で細かい説明の背後に彼の考え方を隠すこともしばしばですが一常にそうだと言っているわけではありませんが、その最大の理由は既に指摘しましたように、大半の近代思想が持っている時代に制約された一時的で性急な均衡を失った性格によっています。いずれにせよカントについては、いくら長い目で見ると必要があるでしょうが、少しぐらいはそれを遅らせた方がいいかもしれません、私はむしろそのように考えます。スペンサーの *First Principles*, モダンライブラリーの廉価版に収められているジェイムズの諸著作、ベルクソンの *Introductio to the Metaphysics*, デューイの *Experience and Nature* などがいいでしょう。私が特に進めたいのは、J.H.ランダルの *The Making of the Modern Mind* です。この書物は、中世以後の哲学史を補完するには申し分のない素晴らしい作品です。あなたはもう普通の哲学史の書物は持っておられるでしょうが、私はウェーバーの簡略な哲学史が気に入っています。必要充分にして素晴らしい哲学史としてはヴィンデルバントのものが好きです。またロジャーズは引用を縦横に駆使しつつ、適切な批評を行っています。

ホワイトヘッドは既にあなたに伝統的な思想家たちをどのように見ればよいかのヒントを与えています。それを徹底的に調べてみてください。それがどのようなことなのか分かれば知らせてください。私はそれを楽しみにしています。もう一冊書物を追加しましょう。それは、マクミラン出版社のジョセフ・ニーダム編 *Science, Religion, and Reality* です。この中には、特に哲学的に興味深い二つの論文が収められています。一つは物理学に関するエディントンの論文、もう一つはディーン・イングの結論部の総括です <Ing という名前は、誰かが言ってましたが、鋭く刺す [sting] と韻を踏んでいます。思わず身を引く [cringe] じゃないですよ>。私は個人的には余りディーンを高く評価していませんが、現在の思想界を振り返った彼の要約はよくできています。エディントンはまったく優れた人物です……。彼は、科学が形而上学の発展に寄与する点について簡略に要約していますが、彼なら当然のことでしょう……。プラトンの著作はどれを読まれても有益です。もっとも重要な著作は、『テアイテトス』、『パイドロス』、『ティマイオス』でしょう。ただし倫理学の方面では、『プロタゴラス』、『ゴルギアス』、『フィレボス』、『リパブリック』が大切でしょう……。おそらく<プラトンの>重要性を完全に理解することは、哲学の将来のために取って置かれるべきだと思います。せめてその前にこれを理解するにはパースを読んでおく必要があります<もしそう

であれば、私は騙されていないことになります>。

これでじゅうぶんでしょう。

この手紙はまったく哲学そのものですね。今度の手紙ではもう少しだけた話題を書こうと思います。とにかく、あなたからの手紙ならいつでも大歓迎です。

私の<感覚>に関する書物は、ほぼ構想ができあがっています。後はただ書けばいいだけです[実際にこの書物が公刊されたのは8年後の1934年である]。冗談を言っているわけではありません。何につけ難しいのは、全体のプランを立てることですから……。その他の付随した事柄はおおむね本能と習慣とでけりが付けられますが、計画の骨子を輪郭づけるには<天が落ちようとやり遂げようとする>強い意志力が必要になります。もっとも何をするにしても同じでしょうが。素晴らしいクリスマスカードありがとう」。

確かにこれは、ハーツホーン自身が言っているように紛れもなく哲学論議である。ハーヴァード時代の彼の関心の一部がこれによって読み取ることができる。急進主義や保守主義の両極端を廃し、中道を探ろうという姿勢。ホワイトヘッドやパースの影響が強く感じ取れるのは言うまでもないが、批判の言葉も忘れないしたたかさ。現代(1926年)が思想的混沌から抜け出る時代だという認識、並びに東洋思想への配慮。考えるべき事柄は存分に揃っている。今こそまさに哲学研究の好機である。これが、若干29歳の若き思想家ハーツホーンの当時の想いであった。

これらはどれも哲学的には興味ある内容だが、6歳年下の女性ドロシーに対する手紙としては、些か興ざめかもしれない。しかしこのアドバイスを受けて、ドロシーの父親がわざわざシカゴ大学の図書館に出向き必要な書物を帯出している<DL. p.182>。ドロシーはその後、植物学を研究したらしいが、科学や哲学にはそれほど関心を持たなくなる。彼女の関心はもっぱらオペラに向けられた。その意味では、先の懇切丁寧なハーツホーンのアドバイスも功を奏さなかったわけだが、感性を認識の土台に据えるハーツホーンの思想には、音楽との共通性が窺えるし、後年、鳥の鳴き声を本格的に研究する道とも重なっている。ハーツホーンは55歳と56歳の夏にミシガン大学の生物学センターに通い、鳥類学を新たに研究し直しているが、これも、彼女の励まによるところが大きかった<IAH. p.29>。

いずれにせよこの時点では、まだ両者とも結婚など夢想だにしなかった。ボストンとシカゴでは距離が離れすぎていたことなどもあって、結婚までの道のりは遠いと感じていた<DL. p.213>。しかし二年後、シカゴ大学に新任の知り合いの教員が来ると知った母が、彼を食事に招待した<IAH. p.28>。ハーツホーンは、今回は躊躇することなく彼女との結婚を決意している。1928年の12月のことである。ハーツホーン31歳、ドロシー24歳であった。

相応の年齢で結婚したために、結婚に伴う不安はなかった。両者とも自分のこともよく分かる年齢になっていた。ハーツホーンには看護兵時代の貴重な経験もあった。家事にも協力し、女性の才能にも理解を示した。一方、ドロシーも、父はシカゴ大学で博士号を取るような人物であったし、母も古典に関する修士号を持っているような環境に育った。アカデミックな家庭環境にはむしろハーツホーンよりも馴染んでいた。このような二人の結婚生活が、月並みであるはずはなかった。ハーツホーンの側から見れば、学者として生きる上には最適なものであったろう。ドロシーは並外れた教養の持ち主であったし、理解力も優れ、学者仲間の人間付き合いにも卒がなかった。「彼女には

学者が何を必要としているかは分かっていたし、積極的に研究を支援してくれた」＜DL. p.214＞。同時に「書物の編集や校正にかけては専門家であって、私の著作目録の編集では第一人者でもあった」＜DL. p.215＞。その後のすべての著作には、彼女の校正と編集が施された。**Living Philosopher** シリーズの *The philosophy of Charles Hartshorne* に収められた巻末の著作一覧は、妻ドロシーによって作成された。そこには主要著作19冊の発表年代をはじめ、5百近い論文の所出一覧が含まれている。ほぼ完璧なリストである（ただし、ドロシーの作成したのは1980年までの諸著作である。ドロシーが病に倒れたため、その後はハーツホーン自身が整理している）。その意味では、ドロシーは思想家ハーツホーンの生涯の伴侶としては最高の人物であった。

VIII-2 シカゴ大学とシカゴ学派

シカゴ大学は、1892年ロックフェラーが資金提供して設立された比較的新しい大学であったが、当時の慣例に反して、大学名はロックフェラー自身の意向で地名が選ばれた。あらゆる意味で進取の気性に富んだ特異な大学であった。彼は、資金は出すが大学運営について口は出さないという姿勢を貫き、当時としては破格の資金3500万ドルをシカゴ大学に提供。その資金を元に、初代学長ハーパーは、イエール大学から5名の大物教授、大学院大学を目指して1889年に設立されたばかりのクラーク大学からは半数の教授を引き抜いている。生き馬を抜く強引な手腕が、アメリカ初の大学百貨店という異名を取る新規な大学を生み出させた。企業家とも言えるハーパーだが、大学教育については、「大学は学問上の仕事以外のことには何らかかわらない。仕事、とどまることのない仕事、これあるのみである」＜『アメリカの大学』226頁、講談社学術文庫＞という認識に立って、大学院大学を目指す研究中心の大学運営を行った。また一年4学期のクォータ制の導入や大学出版部の併設などもシカゴ大学がはじめて行ったものである。このハーパーは1906年に死去している。

デューイがミシガン大学から、シカゴ大学の哲学、教育学、心理学三学科の部長として移籍したのは1894年。この時、デューイはミシガン大学の同僚であったミードも引き連れてきた。2年前には既にタフツがシカゴ大学に着任していた。そしてウィリアム・ジェイムズが「ハーヴァードには思想はあるが、学派はない。イエールには学派はあるが思想がない。シカゴにはその両方が揃っている」と認めたのが1903年。この年には、デューイの『論理学的理論の研究』が出版されている。いわゆるシカゴ学派の形成である。しかしデューイは翌1904年にはコロンビア大学に移ってしまった。しかしシカゴ学派の影響は、デューイの後を受けて哲学科長になったタフツやその後に科長になるミードたちに受け継がれた。プラグマティズムを標榜するシカゴ学派はなお健在であった。

ハーツホーンが、ハーヴァード大学からシカゴ大学に移ったのは1928年である。彼は、当初の印象を次のように記している。「思想的にはハーヴァードとは異なった雰囲気であった。ハーヴァードでは、ルイスだけがデューイやミードを研究していたが、シカゴではこの二人の思想が他を圧倒していた」＜IAH. pp.26-27＞と。これは、当時のシカゴ大学哲学科の陣容を見れば明かである。まずデューイの同僚で当時の科長でもあるミードやタフツが最年長者としていたし、彼らの影響を強く受けたトマス・ヴァーノー・スミスやエイムズ＜Ames＞、バート＜Burt＞、そしてハーツホーンがシカゴ大学に移籍する際に尽力を惜しまなかったアディソン・ムーアらがいた。彼らはすべておおむね無神論者か不可知論者であって、唯物論者、二元論者に分類される人物であった。

「私のような形而上学的な観念論者ないし有神論者はいなかった。ムーア以外は気軽につき合える人々ではなかった。彼らはすべて有能であった。とりわけタフツ、ミード、エイムズ、スミスたちは優れていた。スミスは政治問題に優れた知見を示し、自分の知性の限界にも理解があり、彼の忠告はその公平無私な観点と問題の核心を捉える才能において特に優れていた。私とはまったく異なる立場にしながら私の才能も軽視することはなかった。エイムズも素晴らしい人間であった。しかし彼らは、私が受けた哲学教育とは余りにもかけ離れた環境の中で育てられた」と感じた＜DL. p. 219＞。ハーツホーンは、新天地シカゴで、人生の伴侶を見出した新婚早々に、思想的には自分とはまったく異質な哲学者たちの中での生活を強いられた。「孤独な一匹狼の状態にあった」と述懐している＜DL. p.219＞。この後、チャールズ・モリスとチャーナー・ペリーが加わり、彼らの友好的な態度にいくらか心を和ませながらも、彼らも結局はエイムズらと同じような環境に育ったために、孤独感は癒えなかった。観念論者のホールは、まもなくスタンフォード大学に移籍し、思想的な親近者を失っている。

1930年〔注：『アメリカの哲学者辞典』では1929年学長就任となっている。また現存の哲学者双書の「自伝」でも赴任の翌年となっている＜IAH. p.30＞。〕には、シカゴ大学の教育改革を中心に、アメリカの高等教育に多大な影響を与えたロバート・メイナード・ハッチンスが学長として赴任し、哲学科も変わりはじめた＜DL. p.219＞。学長ハッチンスは若干30歳であった。ハーツホーン的人物評では、ハッチンスは大変真面目で、聡明かつ高邁な青年で法律の専門家で教育にも大きな関心を持っていたらしい。1938年、集中講義のためにシカゴ大学に訪れたラッセルなどは、シカゴの気候に辟易すると同時に、ハッチンスのことを、ネオトミズムを哲学科の教員たちに強要する人物と酷評している＜AUTOBIOGRAPHY. p.458＞。

教育改革に燃えるよハッチンスは、二人の友人モーティマー・アドラー、リチャード P・マッケオンと自分を崇拝するスコット・バッチマンらをシカゴ大学に強引に着任させようとして、当時の科長ミードをはじめ、マーフィー、バート、ホールらを結果として哲学科から転出させてしまった。バートはコーネル大学、マーフィーはブラウン大学、ホールはスタンフォード大学に、それぞれ転出した。一方、マッケオンはギリシア哲学講座のスタッフに落ちつき、アドラーは哲学科教員には歓迎されずに、法学部に籍を置いた。バッチマンは一蹴された。シカゴ大学の人事騒動は、それ以前に病気で退職したタフツ、ムーアの2名を含めると、結局、6人の教授のうちエイムズとスミスだけが残留という結末に終わった。

ハーツホーン自身はこの時期ヨーロッパにおり、もめ事の真っ最中にはいなかったようだが、残った人物とも学長ハッチンスが引き連れてきた人物とも、結局、思想的には理解し合えることはなかった。新任者のトミストと旧来のプラグマティストたちとの論争を回顧しながら、ハーツホーンはこの両者の立場とも異なった自分の考え方を以下のように述べている。

「その当時、私は哲学科では目立たない若手のスタッフであった。私が価値を見いだしていた哲学は＜シカゴ学派＞のものでもなく、ハッチンスや彼の仲間たちのものでもなかった。ハッチンスとマッケオンがトミストでないこと、あるいは時代錯誤の中世主義者でもないことはよく分かっていた。しかし彼らには、カントとヘーゲル以来、思弁哲学に何が起こってきたかがまったく分かっていないと思った＜今もそう思っている＞。私は、古代および中世の形而上学については、ミード

やスミスのシカゴ学派以上に深く考えていたが、同時にライブニッツからパース、ベルクソン、ホワイトヘッド、モンターギュに至る一つの伝統に心酔していた。これは、ハッチンスやアドラーが哲学の伝統として重要視するものとは異なる考え方であった。ある意味では、それは確かにプラトンのものと言ってよいが、プラトンの古代の弟子たち、とりわけアリストテレスとは異なった立場である。このような考え方は、またデューイやミード、つまりシカゴ学派ともかけ離れたものであった」と＜DL. p.222＞。

『宗教の心理学』で知られるエイムズは、宗教を合理的なものと解釈せずに、いくらか曖昧にした方がよいという考え方の持ち主であったが、ハーツホーンの理詰めの思考法には賞賛の言葉を惜しまなかった。またパースの著作集の編集にも「まったく素晴らしい」と評価した人物でもあった。しかし彼がハーツホーンに物理学のことを質問しようとした際に、ハーツホーンは同僚のカルナップに聞く方がよいとアドバイスしたが、そのことを振り返ってエイムズは、「この時だけはハーツホーンも謙虚であった」と書き記した。この言葉が未だに脳裏から離れないとハーツホーンは回顧している＜IAH. p.35＞。いずれにせよエイムズも、多彩な事柄に関心を持った人物であったが、ハーツホーンの専門的な哲学上の関心には大して興味を持つことはなかった。テキサスの貧しい家庭に育ちながら30歳代には教授となり、後には作家、演説家、議員として名を馳せるスミスも、結局は同じような人物であった＜DL. p.220-221＞。

ただ新任のマッケオンについては、その優れた歴史観に影響されたらしく、ハーツホーンは、「私の考え方に歴史に対する強い関心を呼び起こした。彼からは対比や比較を通して哲学を扱う方法、とりわけプラトンとアリストテレス、プラトンとネオプラトニスト、アリストテレスと中世のアリストテレスの信奉者との比較に関する手法を勉強させてもらった」と述べている＜IAH. p.32＞。

しかしこの時期の大きな収穫は、おおむね哲学科の同僚たちからではなく、シカゴ大学の科学者たちで組織されていたXクラブから得られた。このクラブは科学者たちのクラブであったが、哲学者を必ず一人参加させるという暗黙の規定があり、その規定に即して哲学科からただひとりバートが加わっていた。しかしバートの退職に伴い、ハーツホーンが哲学者としてそのクラブに加入を許された。このクラブは、月に一度、会員たちの前で自分の論文を発表し、意見を公刊するという体裁のものであった。なおハーツホーンはこのクラブの代表者に2度選出されている。

このクラブには、遺伝学者のシーウォール・ライト、生理学者のラルフ・ジェラード、同じく生理学者のラルフ・リリー、白蟻の世界的権威アルフレッド・エマーソンらが名を連ねていた。この科学者集団から、ハーツホーンは強い刺激を受けた。とりわけシーウォール・ライトとは家族付き合いの間柄になっている。ライトは1889年生まれで、ハーツホーンよりは8歳年長であったが、木村資生の『生物進化を考える』には、「温厚で内気なタイプで、先生と少し話したくらいではとても大学者などとは考えられるような地味な方である」＜同書 p.41＞と言われるような人物であった。なお彼は1988年、99歳で死去している。ハーツホーンは、彼が自分と同じような考え方をしていことに大きな共感を抱いた。その後の著作にも、彼の名はしばしば同じ考え方をする科学者として引き合いに出されることになる。彼のどのような考え方にハーツホーンは引きつけられたのか。ハーツホーンの批評を見てみよう。

「その知識は自然科学の全分野に及び、科学上の結論と哲学上の信念との相違にも理解を示せる卓越した科学者であった。また両者の問題をはっきりしたもの言いで語れる人物でもあった。神に関する彼の哲学上の立場は、不可知論であったが、私の主張する精神主義＜psychicalism＞にも、私と同様に、確たる信念を持っていた。彼も、私が七十年来そう信じてきたように、心身二元論は理性に反すると考えていたし、一元論的唯物論にはまったく関心がなかったらしく、彼からその言葉を聞いた記憶もない。結局、ある種の精神主義だけが選択肢として残された。彼は、私がこの立場を熱心に主張するのを見て満足な様子であった。彼はまた私と同様、自由が単に望むことをするというような自発行為ではなく、もっと微妙なもの、つまり重要な創造的な因果関係を持ったものだ考えていた。ライトは、自分自身でこのような結論に至った。汎精神論＜panpsychism＞については、カール・ペアソンがそれを批判していたことから学んだようだが、彼には、ペアソンの批判よりむしろ汎精神論の方が優れていると思えた」＜IAH. pp.31-32＞。

ライト以外にも、ラルフ・ジェラードも厳格な決定論者でありながら、精神主義に傾いていた。哲学科の同僚たちからは同意を得られなかった立場が、哲学者ではなく科学者に理解された喜びは大きかった。身近な科学者が汎精神論の立場に立っていることに強い後盾を得た思いであったのだろう。もっとも同感者や理解者ばかりではなかった。白蟻の世界的権威であるエマーソンとは、哲学上の問題を論議していたときに、一度、激議になり、側にいた人間が仲裁に入るほど一触即発の危うい状態になった。「何の論議かは私には分からないが、おそらくハーツホーンの方が正しいはずだ。エマーソンの方がもっとおかしいから」＜DL. p.228＞と言って仲裁に入っただろう。もっとおかしいという仲裁者の表現に当時の両者の姿が彷彿とする。ハーツホーンの論議好きには定評があるし、おそらくハーツホーンにも問題があったのだろう。興奮の余り何を具体的な論議については記憶にないようだ。いずれにせよ、ハーツホーンもライトやリリーも、自然には精神が浸透しているという立場であったが、エマーソンはもっと二元論的であったと述懐している＜DL. p.228＞。

このようなエマーソンに対するハーツホーンの批評は厳しいものになっている。曰く、「エマーソンは、刺激的な人物ではあったが、どちらかと言うと、二元論者であって＜DL. p.228＞、ライトと比較できるような知性はほとんど持っていなかった」と＜IAH. p.32＞。このXクラブではおそらく色々なことが議論されたにちがいないが、ハーツホーンが記しているのは、生命観や個体観にちなんだ論議である。例えば、エマーソンは、動物の集団も白蟻のコロニー同様にほとんど一つの個体と言ってよいほどの統一性を持った共同体だと見なしうと考え、それをスーパーコロニー＜supercolony＞と呼んでいたが、ハーツホーンは、コロニーの統一性は、一匹の白蟻に見られる統一性ほど強くはないと主張し、これに異議を唱えた。コロニーは、一個の白蟻ほど優れたものではなく劣っているというのがハーツホーンらの主張であった。つまり一匹の白蟻には、わずかながらも自分自身の感情があると見なせるが、コロニー自体には、人間や家族のコロニーがそうであるように、感情のようなものは存在しない。コロニーの持つ「精神」は、一つのグループの精神であって、比喩的にしか一つの精神とは呼べない＜DL. p.229＞。これが、ハーツホーンやライトの見解であった。全体に一つの個体が持つ精神を持たせるのは、行き過ぎだというわけである。

ハーツホーンのこの考え方は、ライプニッツから大きな影響を受けて形成された。

「哲学はライプニッツ以来、2つのグループに分かれる。それは、ライプニッツが哲学の歴史上はじめて極めて明瞭に見抜いた事柄を同じように見抜くグループと見抜かぬグループとである。つまりある一つのものの全体に感覚力はあるかと問う以前に、そもそもそのような全体は諸個体の集合体<aggregate>と見なす方がいいのいか、それとも一つの単一なよく統一された個体と見なす方がよいのかどうかを、まず決定する必要がある。この問題は、いわゆる生命を感じさせない対象に関して生じる。石には生命がない。従って滝にも生命はない。しかしまさにこの基準から、分子には生命がないことはないという否定命題が正当化される。なぜなら分子には統一性があるし、たゆまない自己運動、自己活動がある。しかもそれは、単に一つの集合体としてではなく、完全に一つの統合体<one>として行動している。ライプニッツやライト、パースやホワイトヘッドその他の哲学者たちが、もの<entities>を生きたものと生きていないものとに区分した意図もこの点にある。この点を捉えられるかどうか分岐点である。ライプニッツ以来この点を取り逃がす人間が多くなっている」<DL.p.229>。

まさにエマーソンはこの点を取り逃がし、ライトはよくこれを理解していた。ハーツホーンが、エマーソンよりライトに親近感を持ったのはある意味では当然のことであった。また科学は価値をどのように捉えるかや遺伝子は一つの個体であるかというような問題についても論議された<DL.p.230>。エマーソンは、この場合も、種の存続だけが科学の認識できる唯一の価値基準であるという立場を採り、ラリーは、もっと極端に、いくら制限を付けながらも価値は生存にまったく無関係であるという立場であったという。いずれにせよ、ハーツホーンはこのクラブに25年間所属し、ハヴァーフォードでも、ハーヴァードでも教えられなかった数多くの知識を享受した。ハーツホーンが当時の自然科学の状況に関しておよそその見通しを持つことができたのは、ホワイトヘッドとパースによるところが大きかったが、このXクラブでの科学者たちの恩恵も無視できないものであった。既に知遇のあった鳥類学者たちを加えれば、彼の自然科学に関する思想の輪郭はほぼ出尽くしたことになる。

VIII-3 ハーツホーンとカルナップ

ハーツホーンは、マッケオンが学部長<Dean>に就任した際に、学科長に適当な人材がいなかったために、しばらくの間、人事権を持った学科長待遇のセクレタリーになっている。この時、チャールズ・モリスの提案で、ルドルフ・カルナップをプラハ大学からシカゴ大学に転任されることに成功している。ライヘンバッハもという狙いであったらしいが、結局、ハーツホーンはライヘンバッハ〔注：彼は、1938年にカリフォルニア大学に招聘されている。カルナップは、彼の後任として1954年にはカリフォルニア大学に転出した〕よりもカルナップをとという意見に同調した。

シュリッックらによって1922年ウィーン大学で創始されたウィーン学団は、1931年に、カルナップがプラハ大学理学部助教授に転出し、学団の危機が叫ばれるなか、彼はなおもそこで支部を作って活動し続けた〔注：モリスとはこの支部で知遇を得ている〕が、同年ファイグルがアメリカのアイオワ大学に転出、1934年にはハーンが死去。1935年には、パリで第1回国際大会が開かれ、国際的にも認知された矢先に、1936年には、シュリッックが倫理学の授業に不合格となった学生の逆恨み

から凶弾に倒れるという状況に至った。そして1938年オーストラリアがドイツに併合された後は、アメリカのケンブリッジでの国際大会を最後に事実上消滅した状態にあった。ヴァイスマンとノイラート、ポパーらはイギリスに、メンガーとゲーデルらはアメリカに、それぞれ転出し、ウィーン学団の思想は、イギリスとアメリカにおいて新たな活動期に入る。

カルナップのアメリカ招聘は、このような大きな流れの一つであった。これによってアメリカの思想界に、論理実証主義という新たなシカゴ学派を創出する契機が生み出され、1940年代にはプラグマティズムから論理実証主義へとアメリカ思想界が大きく転換する時期に向かう。

なおこの間、ハーツホーンはスタンフォード大学に美学の授業を担当するため半年間出講し、スタンフォード大学への移籍という話も出たようだが、これも実現しなかった。この場合も、「書くことでは秀でていても、教え方にはそれほど秀でてはいなかった」＜IAH. p.33＞と自分で記している。ハーヴァード大学時代にも、同じような言葉を残しているところを見ると、いくらか教授法に問題があることを自覚していたのであろう。ハーツホーンは、別に腹も立たなかったし、職を変える必要性も感じなかったと、いくらか強気な発言をしている＜IAH. p.33＞。

カルナップがハーツホーンらの尽力でシカゴ大学に着任したのは、1936年〔注；ハーツホーンの自伝『光と影』の記述では1935年になっているが、おそらく記憶ちがいであろう。ヴィクトル・クラフト著『ウィーン学団』7頁には1936年にハーヴァード大学から名誉博士号を取得し、その年にシカゴ大学に移籍と記されている。その他の辞典類を見ても同様に1936年となっている〕。カルナップ、45歳、ハーツホーン、39歳であった。ハーツホーンは、1934年に、処女作 *The Philosophy and Psychology of Sensation* を出版したばかりであったし、1935年7月ーパリでウィーン学団の国際大会が開かれたのが1935年の9月であるーには、*Philosophy of Science* 誌上に、'Metaphysics for Positivists' という論文を発表している。実証主義者たちの形而上学批判と形而上学を論理的にどのように両立させればよいかに注意を払い出していた時期に当たっていた。こうしたこともあって、ハーツホーンは、カルナップ招聘によって更にその方面の勉強ができると喜んだ。

もっともハーツホーン自身は、これまでの記述からも明らかなように、特に数学や論理学を専門にした哲学者ではなかった。ルイスやホワイトヘッド、パースから自然科学や数学、論理学の概念的な意図は学び得たにしても、彼らのテクニカルな知識まで理解できるほどの専門家ではなかった。「物理学者のロバート・マリカン＜Robert Mullikan＞とも知己を得たが、彼との論議では数学音痴が災いして限られたことしか理解できなかった」と正直に述べている＜IAH. p.32＞。

論争好きで、伝統的な神概念に論理的矛盾を感じていたハーツホーンと論理実証主義者の旗手カルナップとの論議の一端が残されている。カルナップに対するハーツホーンの人物評も含めて、少し見ておきた。

「カルナップとはかなり良い関係が持てた。彼は本質的に善意に満ちたいくらか謹厳な人物であったが、自分のことになると、フッサールによく似て極度に融通がきかなくなった……。しかし彼は思いやりのある同僚であった。彼と私との間でも、お互いに、特に私の方だが、双方の言い回しに馴染む努力を払えば、意見交換をすることはできた。私の考えのうち、いくらかでもカルナップに興味を引かせられたのは次の二つであった。一つは、神は、神自身のうちにまったく偶然的なものが無いにもかかわらず、ある偶然に存在する世界の完全な知識が持てるというトマスの神観念を

私が反証した事柄。たとえ神が可能性としてどのようにありうるにしても、神は現実には存在する。しかしかりに違った世界が存在していたとしても、神はこの別の可能性として考えられる世界が存在したという知識（現実には神はこのような知識を持ってない）は持てたはずだ。カルナップは、＜そのような見方に立てば、トマス主義が論理だけで反駁できるということなのか＞と問い返し、私の論理の可能性に興味を示した・・・。

カルナップの関心を引いたもう一つの考え方は、カルナップの初期の限定された理論—論理定項だけを使って表現されるものはどのようなものでも、非偶然的でなければならない。つまり矛盾しているだけでなく必然的に偽か、あるいは一貫しており必然的に真か、のいずれかでなければならない—に似た考えを一般化した理論であった。私の一般化は、彼のその理論を利用して形而上学のカテゴリーを含むように拡張したものであった。つまりある意味では普遍的な定項であるだけでなく論理的な定項でもあるような諸概念—通常は論理的な定項のリストには含まれない諸概念—を含むように一般化したものであった。これによって、形而上学を、厳密に普遍的という理由から必然的であるような諸概念の探求として表現できると考えた。この超論理的＜extralogical＞な用語には、単に構文論的なもの以上のものと見られる様相用語も含まれているし、また最も普遍的な意味での経験や認識の概念も含まれている。カルナップは、この私の理論から、あるいは自分の理論から、次のようなパラドクスが生じることを知っていた。私も既に知っていたか、彼に教えられたかして、それには気づいた。つまり＜一つの個体だけが存在する＞、あるいは＜10個の個体だけが存在する＞という命題を例にとると、これらの命題には超論理的な概念はまったく含まれていないが、しかし必然的に真ではないし、真でもありえない。彼はこのパラドクスに、＜常にかつ必然的に無限な個体が存在する、少なくとも宇宙の時空間には無限の点が存在する＞という解答を与えた。私は、＜全実在は常に、無限の既に過ぎ去った出来事ないしホワイトヘッド的な現実存在＜actual entities＞が存在する＞と解答した。また＜現時点での全体の実在（確かに相対性理論では問題になるが）はこれこれの有限な個体である＞という命題についてはどうかと訊ねる者がいれば、まったく永遠的な観点に立てば、＜今現在＞というものにはまったく確定した意味はないし、＜今現在＞を確定しようとするとすべての試みには、経験的、非論理的かつ非形而上学的な用語が必要になるので、偶然的であることを免れないと答えたい」＜IAH, pp.35-36＞。

カルナップが興味を示した先の論議のうち、後者の論議については、その当時〔注；時期は特定できない〕ハーツホーンが国際学会で発表した論文の内容が直接の契機になっている。彼は、偶然的な陳述を理論化するには、少なくとも一つの経験的概念が必要であるという主旨の発表を行った。カルナップ自身もそこで、非経験的概念、つまり彼自身の用語では論理定項を除いてという条件で、同じような観点を主張したが、ハーツホーンはこれに加えて、ある種の形而上学的概念もまた非経験的であるという立場であった。しかしこの時、問題になったのが、「10個の個体だけが存在する」という命題であった。これは、両者とも純粹にア・プリオリであるにもかかわらず、必然的に真でないとする点では同じであったが、カルナップは、無限に多くのものないし個体が存在することを必然的に真と見なした。空間内には無限に多くの点が存在すると考えられるからである。ハーツホーンは、先に触れたように、この個体ないしもの＜things＞という概念に疑問を抱き、それらをホワイトヘッドの言う出来事ないし現実存在という概念に置き換えることを主張している。この論議

で両者が同意したのは、「或るものは存在する」は偶然的ではないという点であった。

第1のトミス主義批判については、ハーツホーンは、カルナップから貴重な示唆を受けた。その示唆に基づいて、ハーツホーンは、トマス主義の矛盾を引き出せる定式化を以下のように工夫した<DL. p.232>。

P. 神は、この世界が偶然的に存在するという無謬の知識を持っている。

Q. この世界は偶然的に存在する。

R. 神の内には偶然的なものは何も存在しない。

1. Pは、Qを必然的に含意する。

2. Rは、Pが必然的であるか神の知識が神の内にないかのいずれかを必然的に含意する（これは馬鹿げている）。

3. 従って、Qは必然的（必然的な命題が含意するものは必然的）である。

ソッツィーニやホワイトヘッドらの反トマスの解釈では、命題Rは偽だとされ、神にも偶然的な局面があると見なされる。神はまったく変化不可能なものでもないし、無感覚なものでもない。ハーツホーンも同様の立場にたって、トマス主義者は、神に偶然性を認めるか、あるいはPの主張が神について真であることを否定するか、しなければならない<DL. p.233>。伝統的な観点に立って、神には必然的な局面しかないものと規定すれば、必然的な神が偶然的な知識を持つことになって不合理である。その不合理さに気づく必要があるというのである。

カルナップとは、このほか真理に関すること、内的関係と外的関係に関する問題などを論議している。真理に関しては、多くの論理学者や神学者が考えているように、それが時間と独立したものなのかどうかを取り上げ、意見を交わした。この問題は、タルスキーの真理論を離れて考えられることにカルナップも同意したが<DL. p.231>、真理は時間とは無関係だという立場を主張し、新たに生じる真理という概念は常識に反するとした。しかしカルナップは、これによって真理を時間と関係づける論議に決定的な反論が与えられるわけではないことを認めた。結局、ハーツホーンはカルナップから満足な答えは得られなかった。

また内的関係と外的関係の問題については、カルナップも、ムーアの『観念論論駁』での論議が不明瞭である点は認めたが、ハーツホーンがこの問題を念頭において執筆した『神の相対性<The Divine Relativity>』の草稿の一部を彼に見せると、余白のあちらこちらに n.c <not clear> と書かれて返却されている。改めて考え直したものを提示した際も、カルナップはがっかりしながら「これで前のものより明瞭になっていますか」と応じた<DL. p.231>。ハーツホーンは、カルナップの基準では、自分には考えを明瞭にする知識も才能もないか、あるいは彼の基準には何らかの仕方論点が先取されており、彼の言う要件が満たせないのか、いずれかだと結論づけた。

時間と真理との関係も、内外の関係も、ハーツホーンにとっては、因果関係の真理の一面に関わる問題であった。ハーツホーンは、因果関係を一方的に、原因から結果へと影響されるものと考え、結果は原因との関係によってある程度構成されるという立場に固執した。カルナップにはこれを納得させることはできなかった。カルナップが納得しない理由を知らながら、それでもハーツホーンは、間違っているのはカルナップだと主張している<DL. p.231>。

ハーツホーンが、形而上学上の諸概念、特に神概念を新たに論理定項の一つに加え、その概念に意味論的分析を施す必要性に目覚めたのは、おそらく直接的にはこのカルナップの影響であろう。また先に両者が一致した「或るものは存在する」という命題は、その後、ハーツホーンが神存在の論証をする際に前提とする命題でもある。ハーツホーンの伝統的な神概念批判と論理実証主義的の意味論的分析の手法との関係は、彼の思考法に無視し得ない痕跡を残した。

VII-4 神学者、形而上学者との出会い

ハーツホーンは、シカゴ大学では数年間、神学科と哲学科との両方の教員として配属されていた。これは、当時のシカゴ大学ではよくあった。例えば、既に触れたように、デューイは哲学、心理学、教育学の三科の長として籍を置いたし、ミードも教育学科や心理学科に籍を置いたりしていた。ハーツホーンの籍もその慣例に倣ったものであった。ハーツホーンがどのような講義をしたかは定かではないが、神学部の学生がハーツホーンの講義を多く受けるようになった経緯もあって、両学科対象の授業を行っていた。哲学科長のチャーナー・ペリーは、いずれにせよ給料が半分負担で済むので喜んだという冗談も残されている<DL. p.236>。もっともペリーは、ハーツホーンが哲学科に不可欠な人物であることを強調して、「カルナップ以上に重要な人材」と評したとも言われている<IAH. p.34>。しかし講義の内容や計画は科目区分が変わらない限りまったく変更しなかった<DL. p.236>。

ハーツホーンは、シカゴ大学着任後、数年の熟成期間において、1934年には、ドロシーにほぼ完成していると手紙に記していた著作 *The Philosophy and Psychology of Sensation* を出版し、カルナップが着任した翌年1937年には、*Beyond Humanism*, 1938年には *Man's Vision of God and the Logic of Theism* と立て続けに公刊した。処女作は、知覚と価値との二元論批判を中心にした認識論的なものであったが、*Beyond Humanism* や *Man's Vision of God and the Logic of Theism* では、神学論議を含めた比較的広範囲な形而上学的論議を展開している。カルナップの名は、既に *Beyond Humanism* 第14章「論理実証主義と哲学の方法」に見られる。論理学の基礎も分からずに論理実証主義を批判するのは軽率だが、形而上学の新たな動向も知らずにひとからげに形而上学一般を批判するのも軽率であるという立場を表明しながら、カルナップが遡上に乗せる形而上学はすべて古いタイプの実体概念に基づいた形而上学でしかないと主張。そしてホワイトヘッドらの新しい形而上学には論理実証主義者らの形而上学批判は妥当しないと述べている<BH. p.255>。カルナップが1932年に公刊した『言語の論理的分析による形而上学批判』で取り上げた形而上学者は、ヘーゲルやハイデガーの形而上学であった。

ハーツホーンが神概念の意味論的分析を中心に神学論議を述べた著作は、先に見たようにカルナップの批判を受けながら、1948年に出版された。この間に10年の歳月が流れた。しかしハーツホーンが関心を神学に移したことに対して、マッケオンはこの転向を不満とし、「宗教哲学は他の哲学の分野に比較して厳密さに欠ける」とハーツホーンに告げている。しかしハーツホーンは、「厳密さに欠けているからこそ、それを正す必要があるのだ」と応酬した<IAH. pp.33-34>。いかにもハーツホーンらしい返答である。

ハーツホーンがシカゴ大学に着任して思想的にもっとも感化されたのは、神学部とそれに関連す

る三つの神学校に所属していた神学者や形而上学者たちであった＜IAH. p.33＞。シカゴ大学の神学部＜Divinity School＞は、もともとバプテスト・ユニオン神学校を母胎とした学部で、創設後しばらくして学科長になったシェイファー・マシュー以来、宗教社会学への関心が深い学部であった。従って宗教の相対性に比較的早くから興味を示した。そのようなこともあって、ホワイトヘッドの思想にも敏感に反応し、*Religion in the Making* が出版された1926年には、既にヘンリー・ネルソン・ヴィーマンを講師に招き、その内容を講義させるほどであった。この講義が機縁となってヴィーマンは、1927年その神学部の教授になっている。彼はすでに1926年には『宗教経験と科学的方法』、1927年には『宗教と真理との闘争』を公刊し、宗教的経験と科学的方法との両立をはかろうとしていた。また1945年から54年まで神学部の学部長を務めたバーナード・ルーマーも、1949年には『キリスト教の信仰とプロセス神学』を著し、ホワイトヘッドの流れを汲む一つの神学を標榜していた＜*Process Theology*. pp.176-177＞。このシカゴ学派の経験論的神学は、一連の神学論文集を発刊しているが、1969年にはその第七巻 *The Future of Empirical Theology* を公刊している。これにはハーツホーンの弟子であるカプヤオグデンが‘What Is Alive and What Is Dead in Empirical Theology’や‘Present Prospects for Empirical Theology’を寄稿した。

プロセス神学のシカゴ学派は、実質的にはハーツホーンによって形成された学派だが、その背景には先に触れたように比較的自由に神学を捉えようとする神学部の伝統があった。しかしハーツホーンの伝記を見る限り、弟子であり学部長にもなったルーマー以外、シェイファー、ヴィーマンらの名前は挙げられていない。宗教上の概念を論理的に吟味しようとするハーツホーンと、単純な合理的神学を目指そうとする彼らとは、同じように科学的経験的な吟味を大切にするとは言え、方法論において根本的な隔たりがあった。神存在の論証は、決して経験だけによって証明されるものではないというのが、ハーツホーンの信念であった。彼の神学は、経験論的な証明だけを拠り所にする単なる合理的神学ではない。おそらくそのようなこともあって、ハーツホーンは、思想的には比較的親近なはずの彼らの名前を挙げていないのかもしれない。『経験的神学の未来』序文にバーナード・メランドは、「1940年代半ばのシカゴ大学神学部では、ホワイトヘッドの経験主義に即して神学上の教育がなされていた」と述べている。しかしハーツホーンは、思想的には非常に親近な集まりであったはずの神学部でも、刺激は受けながら、結局は孤立を強いられたのかもしれない。

ヴィーマンらが、シカゴ学派のプロセス神学の一翼を担ったのは事実だが、ハーツホーンの自伝『光と影』には、ヴィルヘルム・パウク＜Wilhelm Pauck＞〔注：ティリッヒの自伝を書いている〕、ジョン・ネフ＜John Neff＞、ファーザー・ロナガン＜Father Lonergan＞、カール・ラーナー＜Karl Rahner＞などの名が挙げられている。パウクは、ハーツホーンの伝統的な神学批判、神の不変性に対する批判を促してくれただけでなく、ハーツホーンを神学の真の理解者として高く評価した人物である。ハーツホーンも、彼には一目置いていた。ラッセルは、学長ハッチンスをネオトミズムを強要する人物と酷評したが、実質は、ファーザー・ロナガンやカール・ラーナーなどがトマス主義を現代に生かす工夫を試みていた。しかしハーツホーンの彼らに対する批評は厳しい。

「トマスは、少なくとも極めて明敏で明晰であったが、彼らには、明晰さがただけでなく、失った明晰さを補うだけのものもなかった。例えば、ラーナーは、神は厳密に不変的でありながら、実際に可変的な人間になられた。つまり神は不変性を脇に追いやりつつ、決して不変性を失わないの

だと。しかし私はここに述べられた主張はどれも、ホワイトヘッドのように、始源的性質と結果的性質とに分けて、すなわち抽象的本性と具体的本性とに分けて語る方が賢明だと思う。ラーナーが重要だと考えている〈無限性〉に関しても、私には曖昧な概念で説明の要するものに思える。永遠の可能性の〈充満〉は、明らかに絶対的に無限だが、同時に抽象的で明確な実在性に欠けている。既に創造された実在の総体が、かりにそう思えるように始まりのないものでなければならぬとすれば、それは数的には無限だが、無限の可能性が無尽蔵に実現することはないし、またまったく不可能でもある。前者の無限性という性質が、神の始源的性質であり、後者の無限性が神の結果的本性である。

ラーナーは、神には実在をまったく創造しないという選択肢が持てたと考えていた。まったく創造をしないという自由を神に認めて、いったい何が得られるのだろうか。私にはどうにも納得できない。創造しないより創造する方が善いに決まっている（でなければ、被造物は無価値なものになる）。一体どのように言えば、善をなさずに悪をなすような神に賞賛を贈れるのだろうか。何かを選択するというのは、現実に創造的であるという紛れもない真理ではなく、特殊な創造である。はっきり言えば、ラーナーたちは形而上学の伝統に対して益のあることは何もしていない」〈DL. p.238〉。

VIII-5 プロセス神学（思想）のシカゴ学派

シカゴ大学には、デューイのプラグマチズムの系統を引くシカゴ学派、カルナップを中心にした論理実証主義のシカゴ学派、およびハーツホーンとその弟子たちによるプロセス神学のシカゴ学派の三つのシカゴ学派が形成された。プロセス神学は、ホワイトヘッドの思想に端を発し、ハーツホーンの神学を直接の動機として、カブラによって唱道された神学思想である。誰が最初にプロセス神学〈Process Theology〉という名称を使用したのか筆者には特定できないが、古くはハーツホーンの弟子であったバーナード・ルーマーが1949年 *Journal of Religion*, vol.29. No.3 に発表した「キリスト教の信仰とプロセス神学」において使用している。もっともルーマーは寡作な思想家であったため、積極的には、カブラがシカゴ学派の中心的な推進者となった。

ハーツホーンの弟子には、このカブラの他に、高名なシュバート・オグデンや『モニスト』およびオープン・コート編集者として知名度の高いオイゲン・フリーマン。彼は、ハーツホーンが育てた博士第1号でもある。1953年に公刊された *Philosophers Speak of God* を共同で編集したウィリアム・リーズも、ハーツホーンの弟子である。この編集作業では、リーズがもっぱら種々の材料を収集し、それらに目を通してハーツホーンが最終的な選択をしたようだが、リーズ自身も各人物の思想の断章を紹介する前に付されている序文や後のコメントのかなりの部分を執筆している。フェヒナーの文献はリーズが訳したものにハーツホーンが手を加えた。またハーツホーンがワーズワースを入れる提案をした際には、それを止めるように説得したりもした。まさに共同編集者に相応しい著作である。この書物の公刊時には、イギリスの雑誌に「思い上がった書物だ」という批評も出たようだが、ハーツホーンは25年経った今でもいい仕事をしたと思っているという〈DL. p.235〉。この意味は、今でも売られているという事実が、その書物の有益さを実証しているということである。書物は読まれなくなったときに一切の価値が消失する。それがハーツホーンの本心である。リーズは、1980年に *Dictionary of Philosophy and Religion* を公刊している。

直接の弟子ではないが、ハーツホーンの講義に出席していたノーマン・マーティンとのやり取りには面白い逸話が残されている。「ノーマン・マーティンは、若い論理学者で、カルナップの弟子であったが、私の講義にもいくつか出席していた。私が黒板にある一つの形式的な論証を書いた際、彼は優しく笑みを浮かべて、私の過ちを指摘してくれた。翌日もう一度試してみたが、この時も同じ過ちをしてしまったが、相変わらず笑みを浮かべて正してくれた。3度目にはそれを修正したものを提示して、ようやく彼に受け入れられた。私に怖じ気づくことなくその後も笑顔で正してくれたその人物に言い知れぬ魅力を感じた。彼ほど明晰で細心な論理学者に出会ったことがない」〈DL. p.234〉と絶賛している。彼はその後、ハーツホーンが着任していたテキサス大学に招聘され、同僚になっている。

その他にミルトン・シンガー、ルシオ・シアラヴィグリオ〈Lucio Chiaraviglio〉、ビル・アール〈Bill Earle〉、ボブ・ファルターなどがいる。

このような弟子たちのうち、とりわけ著名な人物がジョン・カブである。彼は、メソジスト派の神学者で、14歳まで神戸に住んでいた。その視野は広く、単にホワイトヘッドやハーツホーンに依拠した神学上の論議に留まらず、仏教やエコロジーにも深い関心を持った現代有数の思想家である。現在も活動が続いているクレアモントのプロセス研究センターは、彼によって1973年に創設された。同時に、エモリー大学でハーツホーンから一年間指導を受けたルイス・フォードと共同で、プロセス・スタディーを発刊している。このセンターがプロセス神学（思想）の拠点として世界的に知られることになる。

このセンターは早くも翌1974年には、バーチの発案で、5日間の国際学会をイタリアで開催した。テーマは「プロセス思想と現代科学」であった。1976年のプロセス研究センターのニュースによれば、出席者は、チャールズ・バーチ、セオドシウス・ドブジャンスキー、ウィリアム・マーディー、バーナード・レンチ、C.H.ウォディントン、アーネスト・フォン・ヴァイツゼッカー、シーウォール・ライト、ミッリク・カペック、チャールズ・ハーツホーン、アーサー・ケストラー、アイヴオール・レクラーク、リチャード・オーバーマン、ジョン・カブ、デイヴィッド・グリフィン、アン・プラモンドン、デイヴィッド・ボーム、フランシス・ズッカーらの、いずれも有名な生物学者、哲学者、物理学者たちであった。

その会議のハイライトは、ボームの講演であった。彼は、伝統的な古典物理学に見られる外的秩序とは異なった、内的秩序の可能性をホワイトヘッド的観点から考え得ることを示唆した。なおその他に、哲学的な問題として次のような話題が取り上げられている〈CPS Newsletter, vol.1, No.1〉。

- (1) 進化における目的ないし究極原因の役割。
- (2) 無生物的存在と生きた存在との関係。生きた存在と意識を持った存在との関係。つまり「創発」と「汎心論」の問題。
- (3) 決定論と自由。
- (4) 階層的秩序を含む秩序の問題。
- (5) 科学者たちが方法論としてプロセス的観点に立った場合、伝統的な観点といかなる相違が生じるか。
- (6) 特定の科学研究でプロセス的観点が採用できるかどうか。

(7) ホワイトヘッドの因果関係理論と複合体 <compounds> の解釈について。

このイタリアでの国際学会によって、プロセス研究センターは世界的に認知されるが、プロセス思想の斬新さは、プロセス神学の主張に典型的に見られる。プロセス神学とハーツホーン自身の神学とは、細部において必ずしも同一のものとは言えないが、プロセス神学という名称のもとにおおよそ一括して明示できる共通した思想はある。グリフィン、それを、カブとの共著 *Process Theology: An Introductory Exposition* の序文において以下のように要約している。少し長くなるが、そのまま全文を訳しておきたい。

「ホワイトヘッドとハーツホーンとの間にはいくつかの相違はあるものの、両者の一致した見解に比べると、その違いは取るに足りない。彼らが共通して主張する立場が、<プロセス思想>であって、その思想に影響された神学上の運動が<プロセス神学>である。<プロセス>という用語からも明らかのように、これは実在を静的に捉えることを拒否して、すべての実在がプロセスに他ならないと主張する運動である。ただ次の二つの点には注意する必要がある。

一つは、同じように<プロセス哲学>と呼ばれうる多くの哲学が存在すること。中でもヘーゲル、ベルグソン、デューイらが静的な存在ないし実体よりも過程を強調することは周知の事実である。もう一つは、ホワイトヘッドもハーツホーンも、自分たちの思想を別の独自の言葉で表現していること。ホワイトヘッドは、世界が個体から成るという自分の思想を<有機体の哲学>と呼んでいるし、ハーツホーンは、<社会的存在論>を強調して、相互に緊密に関係し合う多数の存在があるという立場である。彼は、その主著の表題に<創造的綜合>という用語を使用し、それぞれの存在が合成的多から成る一つの自己創造的存在であることを強調している。また特に関心を持たれている神に関する自分の立場については、それを<新古典的有神論者>と呼び、伝統的な有神論との連続性と断絶性を言い表している。特に自分の立場を伝統的な一面的有神論と区別する必要がある場合には、<二面的有神論者>と呼んだり、また神と世界との関係を示すためには<万有在神論者>と呼んだりもする。しかしこのような相違があるにもかかわらず、この哲学的かつ神学的な我々の運動に、<プロセス>という用語を当てることにした。それは、この運動の主要な特徴がその用語によって示されるから、また既にその用語が定着しているからである。

プロセス神学は神を問題にする。ホワイトヘッドもハーツホーンも<神>という言葉をしばしばためらうことなく使用している。しかし彼らは、自分たちの使用する<神>という言葉が、形而上学や神学で伝統的に使用される<神>ともまた通俗的に使用される<神>とも、哲学的にも宗教的にも大方の点でまったく異なっていることに気づいていた。慣用となっている言葉を慣用から逸れた目的で使用するによって、無神論者だけでなく多くの神学者たちからも反発され続けているが、我々は、その言葉を以下のように使用しようと思う。合わせてなぜそうするのか、またそうすることがどうして正当なのかが、この書物で説明できればと願っている。ただ一般に神という言葉に共通して含まれている言外の意味が、我々の使用する意味と合わないことをはっきりさせるために、あらかじめその中から5つを取り上げて、それらを否定する理由を明示しておきたい。そうすることで、以下に挙げる5つが<神>という言葉に不可欠だと考えている人々には、事前に我々が異なった実在について語っていることも分かってもらえるであろう。

1：宇宙の道德学者としての神

この種の観念は最悪の場合には、神に、立法者ないし裁判官というようなイメージを与えかねない。つまり恣意的に道德規則を公示し、違反を記録しては罰するというようなイメージである。これがもう少し洗練されれば、神のもっとも根本的な関心が道德感情の向上であるとする考え方も見られる。このような考え方があるために、人間には大して重要でない事柄が、神には不可欠な事柄だと見なされ、神の本質的な重要性が道德感情を唯一持つことができる人間だけに制限されてしまうのである。プロセス神学では、この種の神の存在を否定する。

2：不変的で無感情な絶対者としての神

この概念はギリシャ人に由来する。彼らは、＜完全性＞にはまったくの不変性、つまり変化の欠如が含まれると主張した。＜無感覚＞という観念によって、神性は他の存在からまったく影響されてはならず、すべての感受性や感覚的反應を欠如していなければならないことが強調された。神は＜絶対者＞だという主張は、要するに神は現実にはこの世界に関わらず、この世界の方が神に関係するという主張である。というのも、神への関係がこの世界の本質を形成するのだが—この世界を完全に記述するためには、まさにこの世界が神に依存していることが要求される—、何らかの世界が存在するということですらも、神の実在の本質を形成することはないからである。つまり神と世界との関係は、神にとってはまったく外在的でしかない。変化せず、無感情で絶対的というこれらの三つの用語は、結局、すべて同じことを示している。すなわちこの世界は神に何らの寄与もできないこと、またこの世界に対する神の影響も、我々のような世俗の存在の予期できない自己決定行為によってまったく左右されないということである。プロセス神学は、このような神の存在を否定する。

3：完全な支配力を持った神

この概念には、神がこの世界の細部まで決定するということが示唆されている。愛する人間が年若くして亡くなれば、どうしても本能的に「なぜ」と言いたくなる。「なぜ神は今を盛りの人生を奪ったのか」と。またハリケーンのような破壊的な自然災害が起これば、きまって「不可抗力＜acts of God＞」という法律用語が使われる。しかし逆に、炭坑崩落事故に巻き込まれても幸いにして主人が助かったような妻などは、他に多くの主人が亡くなっている場合でも、そのことを神に感謝することだろう。しかし一人を救い他の多くを死に至らせるような神とは、いったいどのような神なのだろうか。プロセス神学は、このような神の存在を否定する。

4：現状を是認する神

これは、どの宗教にも認められる非常に一般的な傾向であって、それは、これまでに挙げた三つのどの概念によっても示されている。宇宙の道德家としての神には、もっぱら秩序に関心を持った神が、また不変的な絶対者としての神には、世界に不変的な秩序を生み出そうとする神が、完全な支配力を持った神には、神の意志によって現在の秩序が存在するという概念が、それぞれ暗示されている。いずれも、神に従順であることがそのまま現状維持に直結している。プロセス神学は、このような神の存在を否定する。

5：男性としての神

女性の解放運動によって、我々の神のイメージがいかに一面の性に深く結びついたものであったかを痛切に思い知らされた。三位一体の三つの「位格」すべてが男性と見なされてきただけでなく、上述の伝統的な神学理論がそれを支持してもきた。このような神はまったく能動的、支配的、独立

的で受容性、感応性を完全に欠いている。もっと言えば、神は、力強くて、融通が利かず、感情に欠け、いかなる支配も拒む強引な男性の典型のように見える。プロセス神学は、このような神の存在を否定する。

プロセス神学がいかに伝統的な神概念と相違しているかは、上記の記述から鮮明に読み取ることができる。伝統的な神学に見られた神の諸属性が、容赦なく批判されているのは痛快ですらある。このような伝統的な諸属性批判については、後にハーツホーンもおおむね同じような主張を展開した。彼の場合、伝統的な六つの神概念批判として、(1) 神は絶対的で、それゆえ変化しえない。(2) 全能、(3) 全知、(4) 神の善性は共感を示さない、(5) 死後の生としての不死性、(6) 啓示は無謬である、という主張が、それぞれ批判に晒された。なおこれは、87歳の時に5週間で仕上げた啓蒙書『神の時間』＜*Omnipotence and other Theological Mistakes*＞での主張である。もっともこれらの新たな神概念を論理的にどのように説明するか、また神存在論証はどのように行うのかについては、ハーツホーンと他のプロセス神学者ではいくらか異なっている。この点については、稿を改めてハーツホーンの新古典的有神論として論じる必要がある。

いずれにせよ、シカゴ大学での直弟子たちがプロセス思想を世界に広め、促進した事実は、一匹狼的な彼のシカゴ大学時代に大きな華を添えている。

VIII-6 フランクフルト大学交換教授

学長ハッチンスの提案で、ナチスによって国外に知性が放出されて低迷しているドイツに交換教授を送る計画が進められた。交換先はフランクフルト大学であった。この交換教授は、当初はアメリカから一方的に送られていた。その一人にハーツホーンが選ばれた。これを選出するにあたっては、学科長のコルウェルが、ハーツホーンの意向を無視して強引に進めたという＜DL. p.238＞。ハーツホーンの気が進まなかったのは、一つは単身赴任であったこと、もう一つは、敗戦国ドイツの惨状を脳裏に浮かべると、それを直視できそうにないという意識を強く持ったためである。しかし拒絶できずにフランクフルトに赴いた。1948年秋から1949年春にかけてのことである。一か月以上家族と離れて暮らしたことのなかったハーツホーンにしてみれば、単身生活の6カ月は余りにも長かった。

フランクフルト大学での講義は、夏休みに集中してドイツ語の哲学書を読みあさっていたにもかかわらず、当初は錆ついた会話力の障害は拭えなかった。ハーツホーンが微妙な観念をドイツ語で表現しようとしている姿は、「まるで舗装用に使う丸石を一つずつはめ込んでモザイクを作ろうとしているようなものだ」と評されたほどであった。しかしこれも5カ月後には、ほぼ解消され、ドイツ人の哲学者との会話でも語学上の誤りを一つも指摘されなかったと述べている＜DL. p.239＞。格段の進歩である。彼は講義とは別に、講演用にドイツ語原稿を持って来ていたが、この原稿は、シカゴ大学の同僚であったパウクの妻、オルガ・パウクが表現上の不適切さを親切に修正している。これは、1949年、*Zeitschrift für philosophische Forschung* (3. no. 4) に‘Das metaphysische System Whiteheads’として結実した。この講演用のドイツ語原稿をもとに六つの大学で講演を行った＜IAH. p.39＞。フランスではソルボンヌの哲学者の前で講演を行っている。質問が多く出

されたようだが、それらのフランス語の質問に必死に返答した。この甲斐あって、後に「多くの質問が出されたが、それによって逆に講演者がいかに論題に精通していたかが明らかになった」という報告を受けている。社交辞令を差し引いても、おそらくそれなりに高い評価を受けたのだろう。1950年には‘Le Principe de relativite philosophique chez Whitehead’という論文がフランスの学術誌に発表されている。

この交換教授の半年間で、ハーツホーンが得た収穫は三つある。一つは、大学院の学生を対象にした授業を円滑に進めるために「ライプニッツとホワイトヘッド」との対比に思い至ったこと。これによってハーツホーンは、両者の単純な比較だけでなく、思想が非対称的に、つまり過去から現在へと一方向的に進歩するという確信を抱くことになる。単純に言えば、ホワイトヘッドはライプニッツから学んでも、ライプニッツはホワイトヘッドから何も学べないということである。〈IAH. p.40〉。もう一つは、クリスマス休暇を利用してスエーデンに出向き、アルフ・ナイマンとアンダー・ナイグレンの二人に会ったこと。この二人の仲は陰悪であつたらしく、できるだけ顔を合わさないようにしていたらしい。ハーツホーンは仕方なく月、水、金にはナイマンと、火、木にはナイグレンと会っている。ナイマンについては、既に彼がハーツホーンの著作を読んでいたこともあって、非常に親切な学者であつたと言われているが、ナイグレン評は厳しい。「ナイグレンは有名な学者ではあつたが、私には、直接ものを見ようとしないまったく典型的な本の虫に思えた。彼の書物『エロスとアガペー』は、実生活上の愛とは何の関わりもない。その書物には、友情や同情、共感についてはいっさい述べられてはいない」〈DL. p.241〉。彼の愛には、他人の経験を共有するという意識がなく、ただ欲望としての愛と他人に幸福を望み、善を望む愛とが述べられているだけだ。ナイグレンがキリスト教の愛について語っても、まったく当のその愛を感じれないというのが率直な感想であつた。最後の一つは、バルトとヤスパースにあつたこと。ヤスパースとの会話については何も覚えていないようだが、バルトは、はっきりとハーツホーンの主張する神の変化を認めたと書き残している〈DL. p.241, IAHp.40〉。バルトは、*Christian Dogmatics* において「神には至高な必然性だけでなく至高な偶然性も存在する」と述べている〈IAH. p.40〉。

交換教授で得たものは、ごく僅かであつた。大して得るものもなく、不快な気分のままシカゴ大学に戻っている。しかし休むまもなく、ハーツホーンは一か月後に控えたアメリカ哲学協会西洋部局での講演原稿の準備に取りかかった。

しかし何について述べればよいか思案に暮れていたときに、ペリーに呼ばれ「あなたがしてはいけないことは、神について語らないことだ」と忠告された。ハーツホーンは素直にその支持に従い、「偶然、愛、対立」というテーマで講演を行った。オイゲン・フリーマンにもう1時間5分も経っていると言われ驚いたほど情熱的に語っている。しかしこの講演は、オイゲンが「これほど1時間5分が短く思えたことはない」と述べたように、充実した内容であつたようだ。他の二人は、2時間以上も講演を行ったが、そのうちの一人は、単なるエゴイストで、知っていながら故意にそうしていたと散々に酷評している〈DL. p.242〉。

[1997年11月29日受理]